

国立国語研究所学術情報リポジトリ

島根県出雲市平田

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野間, 純平, 友定, 賢治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003552

島根県出雲市平田*

野間純平^a

友定賢治^b

^a 島根大学／国立国語研究所 共同研究員

^b 県立広島大学 名誉教授／国立国語研究所 共同研究員

1. はじめに

本稿は、島根県出雲市平田（以下「平田」とする）で話されている方言（以下、「平田方言」とする）の文法について、その概略を記述したものである。

本稿で用いるデータは、筆者らが行った調査において、言語形成期を平田で過ごした話者5名から得られたものである。話者はいずれも男性で、生年は1938年から1951年までの幅がある。また、本稿のもとになる調査は、筆者2名だけでなく、小西いずみ氏、平子達也氏とも合同で行った。本稿の内容には、両氏から得たデータやアイデアが含まれる。もちろん、本稿における誤りなどは、筆者らの責任に帰するものである。

2. 地域の概要

2.1 地理・系統

平田は、以下の図1のとおり、島根県東部、宍道湖の西側に位置する。現在は出雲市に含まれているが、2005年の市町村合併までは平田市であった。本稿における「平田」は、この旧平田市域を指すものとする。



図1 島根県の方言区画（平子・友定2018より）

* 本稿をなすにあたっては、たくさんの方々にお力添えをいただいた。中でも、いつも快く調査にご協力くださっている「平田ただもの会」の皆さん、合同で調査・分析している小西いずみ氏、平子達也氏に改めて感謝したい。そして、多くの貴重なご意見をくださった査読担当の方にお礼申し上げます。

図1のとおり、島根県の方言は^{おき}隠岐方言・^{いづも}出雲方言・^{いわみ}石見方言の3つに区画される。このうち、^{おき}隠岐方言と^{いづも}出雲方言は、鳥取県西部の^{さいはく}西伯地区を含めて^{うんぼく}雲伯方言と呼ばれ、西日本方言における言語島とされている。たとえば、中舌母音の [i] や w 語幹動詞の促音便形など、周辺の西日本方言にはなく、東日本方言の特徴とされる言語項目が存在する。平田方言は、このうち出雲方言に属する。

2.2 話者数・危機の度合い

伝統的な平田方言の話者数は必ずしも明らかではないが、平田の人口をもとに推計してみる。特に若・中年層では共通語化が進んでいることを考慮して、仮に70歳以上を伝統的な方言の話者であるとすれば、平田の人口は2022年1月31日現在で24,027人であり、うち70歳以上は6,881人となる（出雲市ホームページより）。

方言に対する地元の関心は高く、「出雲弁」をテーマとしたイベントが開催されたり、複数の「出雲弁保存会」が組織されたりしている。しかし、その中心は主に高齢世代であり、若い世代への方言の継承が十分に行われているとは言いがたく、過疎化とあわせて地域の課題となっている。

2.3 主要な先行研究

ここでは、概説的・包括的な先行研究を取り上げる。平田方言のみを対象とした先行研究はほとんどないが、山陰方言を対象とした研究の中で出雲方言を扱ったものに、広戸（1949, 1950）がある。広戸の一連の研究は、早い段階での出雲方言の記述的研究として非常に重要なものである。そこから時代が下るが、平田を含む出雲地区の複数地点をフィールドにした友定編（2004）もまた重要である。調査報告書として編まれたもので、特に音韻や表現法に関して重要な資料となる。

そして、本プロジェクトでは、出雲地域における合同調査を行っており、調査地点に平田も含まれる。その成果は木部編（2016）にまとめられており、本稿における記述の一部は、それに拠るところがある。

3. 音韻論

3.1 母音音素

本方言の単母音の音素は /i, e, a, o, u/ の5つである。以下の表1に音価とともに示す。

表1 平田方言の単母音音素

	前	後
狭	i	u
	[i ~ i]	[u ~ i]
広	e	o
	[e ~ e̞]	[o ~ ɔ]
	a	
	[a]	

/i/ は中舌性を持った [i] で発音され、特に [s] や [ts] [ɸ] の後では /u/ との区別が曖昧になる。たとえば、/susi/ 「寿司」、/sisi/ 「獅子」、/susu/ 「煤」はすべて [sisi] と発音され、/cizi/ 「知事」と /cizu/ 「地図」はどちらも [tsizi] と発音され、/hiroba/ 「広場」と /huroba/ 「風呂場」はどちらも [ɸiɾoba] である。ただし、これらのペアが完全に同じ発音で実現するわけではなく、たとえば /si/ は母音が中舌化しない [ei] や [si] で実現することもあるし、/su/ も中舌化しない [suu] で実現することがある。このことから、本稿では、これらのような音節も、/i/ と /u/ で別の音素として解釈する。つまり、[ei] や [si] とともに /si/ に含まれる [si] と、[suu] とともに /su/ に含まれる [si] があるものとする。ただし、その解釈の際には、標準語形との対応関係や、体系内における整合性を考慮するものとする。たとえば、先の [sisi] で実現する「寿司」「獅子」「煤」は、便宜的に標準語形との対応を考えて、それぞれ /susi/, /sisi/, /susu/ とする。また、「くださる」を表す [gosinaha:] は、[si] を含むが、これは /si/ と解釈して、/gos-inahar-u/ ‘くれる-HON-NPST’ と分析する。これは、尊敬を表す派生接辞 -(i)nahar- (5.3.4 節) の整合性によるものである。-(i)nahar- は、母音語幹に後接する場合は oki-nahar-u ‘起きる-HON-NPST’ のように -nahar- の形をとるが、子音語幹には kak-inahar-u ‘書く-HON-NPST’ のように -inahar- の形をとる。[gosinaha:] の [si] は、子音語幹 gos- に -inahar- が接続したことによってできた音連続であるため、/su/ ではなく /si/ と解釈するほうが、整合性がとれていると考えられる。

/e/ は [e] のみならず、狭い [e̞] でも実現し、共通語の /i/ に対応する箇所も [e̞] で実現する。たとえば、「駅」と「息」はどちらも [eki] である。さらに、広い [i] と転写される音もあるが、これも /e/ の異音として解釈する。

後舌の /o/ は特に [m] の後で狭くなって [ɔ] で実現し、/u/ に近づくことがある。

長母音は、母音音素の連続 /VV/ ではなく、長音音素 /R/ を用いて /VR/ とする。これは、母音語幹動詞の命令形を形成する屈折接辞の設定の際に都合がいいと考えるからである。詳細は 5.1 で述べるが、本方言の母音語幹動詞は、mi-「見る」のように語幹が i で終わるものと、ne-「寝る」のように語幹が e で終わるものの 2 種類があるが、その両方において、語幹末母音を伸ばした形が命令形になる。すなわち、mi-i「見ろ」や ne-e「寝ろ」といった形になる。このとき、命令形を作る屈折接辞を -i ~ -e とすることもできるが、末尾母音ごとに別の形態をとると記述するより

も、まとめて長音 R としたほうが経済的である。子音語幹動詞の命令形は kak-e のように -e という接辞をとるので、それとの違いをつける意図もある。このように、長母音を2つの同じ母音が続くと考えて母音ごとに別個に記述するよりも、長音音素 /R/ を設定することで、文法記述にも有効にはたらくものと思われる。

二重母音は、以下のとおり /ai/ /ui/ /oi/ の3種類を設定する。

表2 平田方言の二重母音音素

音素	/ai/	/ui/	/oi/
音声	[ai ~ ae ~ æ ~ ε:]	[ui]	[oi ~ oe]

[ε:] は [ai] や [ae] が融合したもので、長音は2モーラ分の長さを保つための代償延長と考えられる。ただし、形容詞非過去肯定形においてはこの代償延長が起らず、[e] で実現することがある(6.1.1 参照)。

また、個人差はあるが、本方言では、句末や文末などで、[i][e][o] が開きつつ伸ばされるような発音になることがある。この発音は [ame̞a] 「雨」のように二重母音のように聞こえるが、本稿ではこれを表層的なレベルでの現象にとらえ、音韻的には二重母音と解釈しない。先ほどの「雨」の場合は /ame/ と解釈する。

3.2 子音音素

子音音素は以下のとおりである。

表3 平田方言の子音音素

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g	
鼻音	有声	m	n [n ~ ɲ]			
摩擦音	無声		s [s ~ ɕ]			h [h ~ ɕ ~ φ]
	有声		z [z ~ dẑ ~ z̄ ~ dz̄]			
はじき音	有声		r			
破擦音	無声			c [tɕ ~ ts̄]		
	有声					
接近音	有声	w		j		

/s/ の音価は、後続する母音によって、おおむね以下の表4のように分布する。

表4 /s/ の音価とその分布

	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
[s]	[sa]	[si ~ ei]	[suu ~ si ~ süü]	[se]	[so]
[ɛ]		[ei]		[ee]	

/sa, su, so/ の場合には [s] で実現するが, /si, se/ の場合は, [ɛence ~ sense]/sense/「先生」のように, [s] と [ɛ] の両方が現れる。/si/ は母音が [i] の場合に [si] となる傾向がある。一方, [ɛ] が /a, u, o/ の前に来る場合, すなわち [ea, eu, eo] は, 半母音 /j/ を用いて /sja, sju, sjo/ と解釈する。この環境においては, [so:zi] 「掃除」と [eo:zi] 「障子」のように [s] と [ɛ] がそれぞれ音韻的に区別されるからである。/s/ と /sj/ の対立は, いわゆる直音と拗音の対立に相当し, /s/ 以外の子音においても, /a, u, o/ の前で, /C/ と /Cj/ が対立する。音声的には, /Cj/ の音価が, /C/ の音価を口蓋化したものとなっている。具体的な全体像は, 後に掲げる表8を参照されたい。なお, 本方言においては, [(C)juu] の発音が聞かれない, あるいはあらたまったスタイルでの発音に限られる。そのため, 標準語の [(C)juu] に対応する箇所は, [(C)i] で実現する。たとえば, 伝統的には, 「牛乳」は [qi:ni:] , 「九州」は [ki:si:] と発音される。

/z/ においては, 摩擦音と破擦音の違い, すなわち [z ~ dz] および [z ~ dz] は音韻的に区別されない ([dzo:ri ~ zo:ri] 「草履」)。[z] と [z] の分布は /s/ における [s] と [ɛ] の関係と並行的である。すなわち, /za, zu, zo/ では [z] が現れ, /zi, ze/ では [z] と [z] の両方が現れる。[za, zu, zo] は /zja, zju, zjo/ と解釈する。

/c/ および /cj/ の設定については, 少し詳しく説明する必要がある。/c/ は, 破擦音である [t̪s] と [t̪e] で実現する。共通語を含む本土方言では, これらを /t/ や /tj/ として解釈する方法もありえる。しかし, 本方言においては, 以下に示す [t] [t̪e] [t̪s] の分布にもとづいて, /c/ および /cj/ を設定する。

表5 子音 [t] [t̪e] [t̪s] の分布

	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
[t]	[ta]			[te]	[to]
[t̪e]	[t̪ea]	[t̪ei ~ t̪ei]	[t̪eu]	[t̪ee]	[t̪eo]
[t̪s]	[t̪sa]	[t̪si]	[t̪su]		[t̪so]

/a, o/ の前の場合のみ, [t] [t̪e] [t̪s] のいずれも立ちうる ([ta]「田」, [t̪ea]「茶」, [ototts̪an]「お父さん」, [gotts̪o]「ごちそう」)。そのため, [ta] を /ta/, [t̪ea] を /tja/ としても, [t̪sa] を /ta/ と /tja/ のどちらとも解釈することができない。そこで, [t̪s] を /c/ と解釈し, そこに半母音 /j/ が入った /cj/ が基本的に [t̪e] で実現するものとする。ここで, [t̪e] を /tj/ ではなく /cj/ と解釈したのは, 音声的特徴と拗音の体系性に着目したためである。[t̪e] は [t̪s] と同様

に破擦音であり、ちょうど [ts̥] が口蓋化した音と言える。この対立は、[s] を /s/ , [ɕ] を /sj/ と解釈したのと並行的である。一方、[t] が口蓋化した [t̥] は、本方言では聞かれない。以上のように、[ts̥] と [t̥ɕ] の音声的な類似や、半母音 /j/ に関わる他の子音との整合性を考慮すると、[t̥ɕ] の解釈は、/tj/ よりも /cj/ のほうがふさわしいといえる。ただし、/c/ のうち /ci/ の場合のみ [ts̥] と [t̥ɕ] の両方が現れる。以上を踏まえて、各音節を音素で表記すると以下のようなになる。

表 6 [t] [t̥ɕ] [ts̥] の音韻解釈

	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
[t]	/ta/			/te/	/to/
[t̥ɕ]	/cja/	/ci/	/cju/	/cje/	/cjo/
[ts̥]	/ca/	/ci/	/cu/		/co/

/h/ の異音には [h, ç, φ] がある。[h] は /ha, he, ho/ , [ç] は /hi/ , [φ] は /hi, hu/ に現れる。[ça, çu, ço] は /hja, hju, hjo/ と解釈する。

そして、表 3 にはない音節末にのみ現れる子音音素として、/N/ (撥音) と /Q/ (促音) を設定する。/N/ は音節末に現れる撥音である。[m, n, ŋ] と鼻母音で実現するが、それぞれ相補分布する。/Q/ は、音節末にのみ現れる音素 (促音) で、[gak.ko] 「学校」のように、音節末子音と次の音節の頭子音が同じ場合に、前の子音を /Q/ とする。この場合は /gaQko/ となる。/Q/ になる子音連続は、/pp, tt, kk, ss, cc/ である。

/r/ は基本的に [r] で実現する。この /r/ に関して、本方言には「ラ行音節の隠在現象」(室山 1964) と呼ばれる現象がある。/r/ を含む音節、特に /ri/ と /ru/ が脱落し、直前の母音が長音化するというものである。たとえば、/aru/ 「ある」が [a:] と発音され、/hitori/ 「一人」が [φi:to:] と発音される。この現象は、条件が揃えばいつでも起こるというわけではなく、/r/ を含む音節が脱落しない形も許容される。このことを踏まえて、本稿ではこの現象を表層における音声的な現象ととらえ、音素としては /aru/ のように脱落が起きない形を想定する。

3.3 音節構造

音節は、母音を中核にして構成され、以下の表 7 のような構造を持つ。

表 7 平田方言の音節構造

開始部 (onset)	わたり音 (glide)	中核 (Nucleus)	末尾 (coda)
p, b, m	w, j	a, i, u, e, o	N
t, d, s, n, r		aR, iR, uR, eR, oR	Q
c		ai, ui, oi	
k, g, h			

本方言のありえる音節のパターンを、例とともに以下に示す（O：開始部，G：わたり音，N：中核，C：末尾）。

N	/e/ [e̞] 「絵」
GN	/o.ja.zi/ [o.ja.zi] 「おやじ」
ON	/sa.ke/ [sa.ke] 「酒」
OGN	/kwa.si/ [kʷa.si] 「菓子」
NC	/aQ.ta/ [at.ta] 「あった」
GNC	/waN/ [wan] 「椀」
ONC	/daN.saN/ [dan.san] 「医者，警察官」
OGNC	/so.gjaN/ [so.gjan] 「そんな」

以下に、短母音を含むモーラの一覧をその音価とともに示す。（ ）内のものは、非常に少ない、あるいは使用されるスタイルが限定されているものである。

表8 短母音を含むモーラ一覧

/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
[a]	[i ~ i̞ ~ i]	[u]	[i̞ ~ e ~ e̞]	[o ~ ɔ]
/pa/	/pi/	/pu/	/pe/	/po/
[pa]	[pi ~ pi]	[pu]	[pe ~ pe̞]	[po]
/pja/		/pju/		/pjo/
([p ^h a])		([p ^h u])		[p ^h o]
/ba/	/bi/	/bu/	/be/	/bo/
[ba]	[bi ~ bi]	[bu]	[be ~ be̞]	[bo]
/bja/		/bju/		/bjo/
[b ^h a]		([b ^h u])		[b ^h o]
/ma/	/mi/	/mu/	/me/	/mo/
[ma]	[mi ~ mi]	[mu ~ m̥]	[me ~ me̞]	[mo ~ m̥]
/mja/		/mju/		/mjo/
[m ^h a]		([m ^h u])		[m ^h o]
/ta/			/te/	/to/
[ta]			[te]	[to]
/da/			/de/	/do/
[da]			[de]	[do]

/sa/	/si/	/u/	/se/	/so/
[sa]	[ɛi ~ ɛi ~ si ~ si]	[su ~ si ~ sü]	[se ~ ɛe]	[so]
/sja/		/sju/		/sjo/
[ea]		([ɛu])		[eo]
/ca/	/ci/	/cu/		/co/
[tsa]	[tɛi ~ tɛi ~ tsi ~ tsi]	[tsu]		[tso]
/cja/		/cju/	/cje/	/cjo/
[tea]		([tɛu])	[tɛe]	[teo]
/za/	/zi/	/zu/	/ze/	/zo/
[dza ~ za]	[d̂zi ~ d̂zi ~ zi ~ zi ~ d̂zi ~ d̂zi ~ zi ~ zi]	[dẑu ~ dẑü ~ zu ~ zü]	[d̂ze ~ d̂ze ~ ze ~ ze]	[d̂zo ~ zo]
/zja/		/zju/		/zjo/
[d̂za ~ za]		([dẑu ~ zu])		[d̂zo ~ zo]
/na/	/ni/	/nu/	/ne/	/no/
[na]	[ni ~ ni ~ ni]	[nu]	[nɛ ~ ne (~ ne)]	[no]
/nja/		/nju/		/njo/
[na]		([nu])		[no]
/ka/	/ki/	/ku/	/ke/	/ko/
[ka]	[ki ~ k̂i ~ ki]	[ku]	[kɛ ~ ke]	[ko]
/kja/		/kju/		/kjo/
[k̂a]		([k̂u])		[k̂o]
/kwa/				
[k ^w a]				
/ga/	/gi/	/gu/	/ge/	/go/
[ga]	[gi ~ gi]	[gu]	[ge]	[go]
/gja/		/gju/		/gjo/
[ĝa]		([ĝu])		[ĝo]
/gwa/				
[g ^w a]				
/ha/	/hi/	/hu/	/he/	/ho/
[ha]	[çi ~ fi ~ fu]	[fu ~ fi]	[he ~ çi]	[ho]
/hja/		/hju/		/hjo/
[ça]		([çu])		[ço]
/ra/	/ri/	/ru/	/re/	/ro/
[ra]	[ri ~ ri]	[ru]	[re]	[ro]

/rja/		/rju/		/rjo/
[rja]		([rju])		[rjo]
/ja/		/ju/		/jo/
[ja]		([ju])		[jo]
/wa/			/we/	
[wa]			[we]	

以上を踏まえて、本稿では、例文を以下のような4段階で表記する。

- 1 段目：音声表記
- 2 段目：音素表記と形態素分析
- 3 段目：グロス
- 4 段目：共通語訳

4. 名詞の形態論

4.1 名詞の内部構造

名詞は、語幹を中心として、接頭辞および接尾辞がつく。それらの接辞には複数接辞と待遇接辞がある。以下、それぞれについて述べる。

4.1.1 単数と複数

名詞には複数を表す接辞 *-jaci* や *-raci* がつくが、普通名詞の場合、数の標示は義務的ではない。たとえば、以下のように複数であっても接辞なしで表せる。

- (1) *ano* *kʷasɨwa* *ano* *gakusega* *kyttakae*
 ano *kwasi=wa* *ano* *gakuse=ga* *kuQ-ta=kai*
 あの 菓子=TOP あの 学生=NOM 食う-PST=Q
 「あの菓子はあの学生が食べたか」
- (2) *ano* *kʷasɨwa* *ano* {*gakusejatsiga* / *gakuseratsiga*} *kyttakae*.
 ano *kwasi=wa* *ano* {*gakuseR-jaci=ga* / *gakuseR-raci=ga*} *kuQ-ta=kai*
 あの 菓子=TOP あの {学生-PL=NOM 学生-PL=NOM} 食う-PST=Q
 「あの菓子はあの学生たちが食べたか」

(1) では *gakuse* 「学生」に複数接辞がついておらず、(2) ではついているが、いずれの場合も「学生」は単数・複数どちらでも解釈可能である。また、以下の (3) における「学生2人」の例が示すように、双数と複数の区別はなく、複数標示も義務的ではない。

- (3) *ano kʷasɨwa ano gakuseʷ ɸuta:ga kɯttakae.*
ano kwasi=wa ano gakuseR hutari=ga kuQ-ta=kai
 あの 菓子=TOP あの 学生 二人=NOM 食う-PST=Q
 「あの菓子はあの学生 2 人が食ったか」

複数を表す接辞は、人を表す名詞だけでなく、以下の例のように動物名詞にもつくことができる。複数標示が義務的でないことも人名詞と同様である。(5) では、「2 匹の犬」に複数接辞がついてもつかなくてもよい。

- (4) *ano kʷasɨwa ano inuga kɯttaka.*
ano kwasi=wa ano inu=ga kuQ-ta=ka
 あの 菓子=TOP あの 犬=NOM 食う-PST=Q
 「あの菓子はあの犬が食ったか」

- (5) *ano kʷasɨwa ano {inu / inuratsɨ} niçikiga kɯttakae.*
ano kwasi=wa ano {inu / inu-raci} ni-hiki=ga kuQ-ta=kai
 あの 菓子=TOP あの {犬 / 犬-PL} 二-CL=NOM 食う-PST=Q
 「あの菓子はあの犬 2 匹が食ったか」

なお、無生物名詞には複数接辞がつきにくい傾向があるが、以下のように、指示代名詞に複数接辞が後接する例が確認された。(6) では、物を指す指示語 *kore* に複数接辞 *-jaci* が接続している。

- (6) *ko:jatsɨ katatsɨkete gose.*
kore-jaci katacuke-te gos-e
 これ-PL 片づける-SEQ くれる-IMP
 「これらを片付けてくれ」

4.1.2 待遇接辞

数以外で名詞につく接辞には、待遇に関わる接辞がある。*o-* などの接頭辞と、*-saN* などの（上向き）待遇辞がある。(7) では、*cuki* に接頭辞の *o-* と接尾辞 *-saN* がついており、(8) では、*jome* に接尾辞 *-saN* がついている。

- (7) *a:wa oʷsikisandadzi.*
are=wa o-cuki-saN=da=zi
 あれ=TOP POL-月-TTL=COP.NPST=SFP
 「あれはお月さんだよ」

- (8) *taro.niwa* *jomesanga* *oran.*
taroR=ni=wa *jome-saN=ga* *or-aN*
 太郎=DAT=TOP 嫁-TTL=NOM いる-NEG
 「太郎には嫁さんがいない」

4.2 代名詞の構造と体系

4.2.1 人称代名詞の体系

人称代名詞の体系は、以下の表 9 のようになる。

表 9 人称代名詞の体系

	単数	複数
1 人称	<i>ora</i> <i>adaN</i>	<i>ora-jaci</i> <i>adaN-jaci</i> <i>adaNci</i> <i>waR-jaci</i> <i>waRwa</i>
2 人称	<i>omai</i> <i>omai-saN</i> <i>aNta</i> <i>aNta-saN</i> <i>waR</i>	<i>omai-jaci</i> <i>omaici</i> <i>omai-saN-jaci</i> <i>aNta-jaci</i> <i>aNta-saN-jaci</i> <i>waR-jaci</i>
3 人称	<i>aici</i> <i>ano si</i> <i>ano saN</i> <i>ano mae</i> <i>ko(N)na</i>	<i>aici-jaci</i> <i>ano si-jaci</i> <i>ano saN-jaci</i> <i>ano mae-jaci</i> <i>ko(N)na-jaci</i>

基本的に、1 人称には *ora* が用いられる (*wasi* を用いることもある)。*adaN* は古い形式で、あまり使用されない。1 人称代名詞には双数と複数の区別はなく、複数接辞 *-jaci* によって単数と複数が区別される。以下の (9) と (10) はそれぞれ包括と除外の例だが、どちらにおいても *ora-jaci* が用いられており、包括と除外の区別がないことがわかる。

- (9) *ano kw^waεa: orajatsi̇ φuta:de kw^wakoi.*
ano kwasi=wa ora-jaci hutari=de kuw-a=koi
 あの 菓子=TOP 1-PL 二人=INST 食う-VOL=SFP
 「あの菓子は私たち2人で食べよう」
- (10) *kono kw^waεa: orajatside ku:ken omaeniwa jaran.*
kono kwasi=wa ora-jaci=de kuw-u=keN omai=ni=wa jar-aN
 この 菓子=TOP 1-PL=INST 食う-NPST=CSL 2SG=DAT=TOP やる-NEG
 「この菓子は私たちで食べるから、おまえにはあげない」

2人称は *omai* が用いられる。複数の場合は *-jaci* をつけて *omai-jaci* となるが、*omaici* という形も確認された。おそらく *omai-jaci* に由来する短縮された形のようなものと思われるが、*-ci* という複数接辞を立てることはしない。1人称複数の *adaNci* についても同様である。

aNta は、*omai* よりも待遇が高い2人称代名詞である。また、接尾辞 *-saN* をつけた *omai-saN* や、*aNta-saN* もまた待遇が高い形式である。これらの待遇が高い形式の場合、複数接辞には *-jaci* だけでなく *-gata* も用いられる。

- (11) *ano kw^waεa: {omaesȧjatsi̇ga / omaesangataga} kw^waemasitakane.*
ano kwasi=wa {omai-saN-jaci=ga / omai-saN-gata=ga} kuw-ae-mas-ita=kane
 あの 菓子=TOP {2-TTL-PL=NOM / 2TTL-PL=NOM} 食う-HON-POL-PST=Q
 「あの菓子はあなたがたが食べられましたか」

そして、*waR* は「我」に由来すると思われる語で、1人称と2人称にまたがって用いられる。1人称の場合は、*waR-jaci* あるいは *waRwa*（「われわれ」に由来すると思われる）の形で複数として用いられる。(12) が *waR-jaci*, (13) が *waRwa* の例である（(13)において、述語が過去形であるにもかかわらず命令の意味で訳されていることについては、5.1.1節で述べる）。

- (12) *sono sigotowa wa:jatsi̇ga si:ken*
sono sigoto=wa waR-jaci=ga su-ru=keN
 その 仕事=TOP 1-PL=NOM する-NPST=CSL
 「その仕事は私たちがするから」
- (13) *sono sigotowa wa:waga si:ken omaewa matteotta.*
sono sigoto=wa waRwa=ga su-ru=keN omai=wa maQ-cjoQ-ta
 その 仕事=TOP 1PL=NOM する-NPST=CSL 2SG=TOP 待つ-IPFV-PST
 「その仕事は私たちがするから、おまえは待っている」

waR が 2 人称として用いられる場合は, (14) のように waR が単数を表し, (15) のように waR-jaci という形で複数を表す。

- (14) *sora wa:ga kaeta d̂zi:daga.*
sore=wa waR=ga kai-ta zi=da=ga
 それ=TOP 2SG=NOM 書く-PST 字=COP.NPST=SFP

「それは君が書いた字だよ」

- (15) *sora wa:jatsino kasidagana.*
sore=wa waR-jaci=no kasi=da=ga=na
 それ=TOP 2-PL=GEN 菓子=COP.NPST=SFP=SFP

「それは君たちの菓子だよ」

3 人称専用の代名詞は, 基本的に指示代名詞を用いる。表 9 には, ア系の指示詞 (4.2.2 参照) を代表として掲げている。aici のような人を表す指示代名詞だけでなく, 以下の (16) から (18) に示すように, 指示連体詞 ano などと=si, =saN 「人」や=mai 「方」を組み合わせた形も用いる。

- (16) *sono sigotowa anosiga si:ga:.*
sono sigoto=wa ano=si=ga su-ru=ga
 その 仕事=TOP あの=人=NOM する-NPST=SFP

「その仕事はあの人がするよ」

- (17) *ano k^waea anosanga kytteattakae.*
ano kwasi=wa ano=saN=ga kuQ-cjaQ-ta=kai
 あの 菓子=TOP あの=人=NOM 食う-HON-PST=Q

「あの菓子はあの人が食われたか」

- (18) *sono sigotowa anomaega sare:to.*
sono sigoto=wa ano=mai=ga s-are-ru=to
 その 仕事=TOP あの=方=NOM する-HON-NPST=SFP

「その仕事はあの方がされるよ」

なお, 指示代名詞ではなく, 3 人称代名詞専用と思われる kona あるいは koNna という形式もある。以下の (19) に koNna の例を示す。

- (19) *konnawa samuugatt̂eo:zi.*
koNna=wa samu-gaQ-cjor-u=zi
 あいつ=TOP 寒い-VLZ-IPFV-NPST=SFP

「あいつは寒がっているよ」

4.2.2 指示代名詞（指示詞）の体系

指示代名詞および指示詞の体系を以下に示す。ここで指示詞としてまとめるものは、代名詞をはじめとしていくつかの品詞にまたがる。

表 10 平田方言の指示詞

	近称 ko-	中称 so-	遠称 a-
代名詞	kore	sore	are
代名詞（有生物）	koici	soici	aici
場所名詞	koko	soko	asuko
方向名詞	koQci	soQci	aQci
副詞	koge	soge	age
連体詞	kogena kogjaN	sogena sogjaN	agena agjaN
連体詞 2	kono	sono	ano

それぞれ、ko, so, a という共通部分を持ち、それぞれコ系、ソ系、ア系とすることができる。使い分けはおおむね標準日本語と同様で、指示対象が話し手に近い場合はコ系、聞き手に近い場合はソ系、どちらからも遠い場合はア系が用いられる。(20) がコの例、(21) がソの例、(22) がアの例である。

- (20) *kore mi:*.
kore mi-R
 これ 見る-IMP
 「（目の前のものを指して）これを見ろ」

- (21) *so:ga hosi:*.
sore=ga hosi-i
 それ=NOM 欲しい-NPST
 「（聞き手が持っているものを指して）それが欲しい」

- (22) *a:wa ʔsɨkɨsandaɖzi:*.
are=wa o-cuki-saN=da=zi
 あれ=TOP POL-月-TTL=COP.NPST=SFP
 「あれはお月さんだよ」 (= (7))

3.2 で言及した「ラ行音節隠在現象」について、/re/ は脱落しにくい、指示詞の *kore*, *sore*, *are* の場合は *re* が隠在しやすい傾向がある（疑問詞の *dare* や *dore* も同じ傾向がある）。上の (21)

と (22) では, sore と are がそれぞれ [so:][a:] という形で現れている。さらに, kore, sore に主題標識 =wa がつくると ka, sa という形で実現することもある。korewa と ka, sorewa と sa には意味的な違いがあることが萩野 (2016) によって指摘されているが, 詳細はまだ明らかでない。

- (23) {ko:wa / ka} da:no moŋkane.
 kore=wa / ka} dare=no moN=kane
 {これ=TOP / これ.TOP} 誰=GEN もの=Q
 「これは誰のものか」

以上は現場指示の例だが, ソ系とア系は文脈指示にも使われる。(24) では, sore が直前の文に出てきた hoN を指しており, (25) では ano が聞き手と共有している記憶を指している。

- (24) kijŋo hon katte jondad̂zi. so:ga gaiŋi jokatta.
 kiNŋjo hoN kaQ-te joN-da=zi. sore=ga gaini jo-kaQ-ta
 昨日 本 買う-SEQ 読む-PST=SFP それ=NOM とても 良い-VLZ-PST
 「昨日, 本を買ったよ。それがとてもよかった」

- (25) kijŋo omaesajga oŋiete goita ano hon mo: jondad̂zi.
 kiNŋjo omai-saN=ga osie-te goi-ta ano hoN moR joN-da=zi
 昨日 2SG-TTL=NOM 教える-SEQ くれる-PST あの 本 もう 読む-PST=SFP
 「昨日, あなたが教えてくれたあの本, もう読んだよ」

指示副詞の soge は, soge=da のようにコンピュータを伴ったり, soge soge のように繰り返して用いられたりして, 相手への同意を表す応答表現として用いられるが, このときに age が使用されることもある。この場合の soge と age の意味的な違いは明らかになっていない。談話資料などを用いて数量的な調査を行う必要がある。

4.3 数詞の体系と構造

数詞は, 数を表す部分に助数詞が後接して構成される。数は, 「ひとつ, ふたつ…」に当たる和語系と「1 個, 2 個…」に当たる漢語系の 2 系列がある。以下の表 11 に, それぞれの 1 から 10 までの語形を例示する。空欄は, 該当する語形がないことを表す。

表 11 数詞の体系

	個数		人数	
	和語系	漢語系	和語系	漢語系
1	hito-cu	iQ-ko	hitori	
2	huta-cu	ni-ko	hutari	
3	miQ-cu	saN-ko		saN-niN
4	joQ-cu	joN-ko	joQtari	jo-niN
5	icu-cu	go-ko		go-niN
6	moQ-cu	roQ-ko		roku-niN
7	nana-cu	nana-ko		sici-niN
8	jaQ-cu	haQ-ko		haci-niN
9	kokono-cu	kiR-ko		ku-niN
10	toRjo	ziQ-ko		ziR-niN

個数を表す語形は、和語系、漢語系いずれも揃っており、和語系は *-cu*、漢語系は *-ko* という助数詞が用いられる。ただし、和語系の *-cu* が用いられるのは 9 までであり、10 の場合は *toRjo* という語になる。以下の (26) のように、*toR* だけでも用いることができるため、*-jo* が助数詞だと考えられるが、この *-jo* が他の数で用いられる例は確認できておらず、生産性はないと考えられる。

- (26) *to:* *tsiga:kane*
toR *cigaw-u=kane*
 十 違う-NPST=Q
 「(年齢が) 10 歳違うのか」

- (27) *to:jomo* *tsiga:kane*
toRjo=mo *cigaw-u=kane*
 十=ADT 違う-NPST=Q
 「(年齢が) 10 歳も違うのか」

一方、人数を表す語形については、基本的に和語系と漢語系で相補分布している。1 と 2 の場合は和語系、3 以上は漢語系の数に助数詞 *-niN* がつく。しかし、4 の場合のみ、和語系 *joQtari* と漢語系 *jo-niN* が併用される。

4.4 格の種類と機能

名詞は、修飾部が主要部に先行して名詞句を形成する。修飾部には、名詞句・形容詞・連体詞・連体節が立つ。そして、名詞句に格助詞・とりたて助詞が後接する。ここでは、格助詞の種類と主な機能を記述する。

名詞の格は、主に名詞に後接する格助詞によって表される。具体的には、以下のような格助詞がある。

表 12 名詞の格と格助詞

格の名称	形式	格助詞としての主な機能
主格 (NOM)	=ga / =no	主語
属格 (GEN)	=no / =ga	名詞句の従属部
対格 (ACC)	=o	直接目的語
与格 (DAT)	=ni	間接目的語
所格 (LOC)	=ni / =de	存在の場所, 動作の場所
方向格 (ALL)	=ni / =e	方向, 着点
具格 (INST)	=de	手段
共格 (COM)	=to	共同
奪格 (ABL)	=kara	起点
限界格 (LMT)	=made	限界
比格 (CMP)	=jori / =joma	比較

以下、それぞれの格助詞について、例を挙げつつ記述する。

4.4.1 主格 =ga / =no

以下のように、主格は自動詞文・他動詞文を問わず主に=ga で表される。(28) が自動詞, (29) が他動詞の例である。

- (28) *hejan naka mitara cencega netcotta.*
heja=N naka mi-tara seNse=ga ne-cjoQ-ta
 部屋=GEN 中 見る-CND 先生=NOM 寝る-IPFV-PST
 「部屋の中を見たら、先生が寝ていた」

- (29) *hejan naka mitara taro:ga tsukue hakondzotta.*
heja=N naka mi-tara taroR=ga cukue hakoN-zjoQ-ta
 部屋=GEN 中 見る-CND 太郎=NOM 机 運ぶ-IPFV-PST
 「部屋の中を見たら、太郎が机を運んでいた」

また、主格に=no が用いられることもある。=ga と=no の使い分けには待遇や有生性が関係していると思われる部分があるが、詳細は不明である。詳しくは平子（2016）を参照されたい。以下の (30) を見ると、主語が「先生」であり、尊敬接辞の -ae-（5.3.4 参照）と共起していることから、待遇が関係していることが推察されるが、(31) のように尊敬接辞と共起しない場合にも=no が用いられることもある。

- (30) *hejan naka mitara eeneeno neŋoraeta.*
heja=N naka mi-tara seNse=no ne-cjor-ae-ta
 部屋=GEN 中 見る-CND 先生=NOM 寝る-IPFV-HON-PST
 「部屋の中を見たら、先生がお休みになっていた」
- (31) *hejan naka mitara eeneeno tsukue hakondzotta.*
heja=N naka mi-tara seNse=no cukue hakoN-zjoQ-ta
 部屋=GEN 中 見る-CND 先生=NOM 机 運ぶ-IPFV-PST
 「部屋の中を見たら、先生が机を運んでいた」

4.4.2 属格 =no / =ga

属格は、主に=no で表され、=N となることもある。属格名詞句と被修飾名詞句の間の意味関係に関係なく、=no および=N が使用される。(32) と (34) は所有関係だが、(33) は「太郎が撮った写真」であり所有関係ではない。

- (32) *koitsywa taro:no oto:todayi.*
koici=wa taroR=no otoRto=da=zi
 こいつ=TOP 太郎=GEN 弟=COP.NPST=SFP
 「こいつは太郎の弟だよ」
- (33) *taro:no easiN itsu mitemo kire:na.*
taroR=no sjasiN icu mi-temo kireR-na
 太郎=GEN 写真 いつ 見る-CNC きれい-NPST
 「太郎の写真はいつ見てもきれいだ」
- (34) *kannossanno iewa attsidazi.*
kaNnosi-saN=no ie=wa aQci=da=zi
 神主-TTL=GEN 家=TOP あっち=COP.NPST=SFP
 「神主さんの家はあっちだよ」

また、以下のように=ga によって属格が表されることもあるが、あまり使用頻度は高くはないようである。

- (35) *koits̄wano:* *taro:ga* *oto:toḍazi.*
koici=wa=no *taroR=ga* *otoRto=da=zi*
 こいつ=TOP=CNF 太郎=GEN 弟=COP.NPST=SFP
 「こいつはな、太郎の弟だよ」
- (36) *taro:ga* *ie* *atts̄idazi.*
taroR=ga *ie* *aQci=da=zi*
 太郎=GEN 家 あっち=COP.NPST=SFP
 「太郎の家はあっちだよ」
- (37) *kannossanga* *ie*
kaNnosi-saN=ga *ie*
 神主-TTL=GEN 家
 「神主さんの家」

(36) の「太郎」と (37) の「神主さん」のどちらにも=ga がつくのをみると、=no と=ga が属格名詞句に対する待遇によって使い分けられているようではなさそうである。

4.4.3 対格 =o

他動詞文における直接目的語を表す格助詞は=o である。ただし、直接目的語は、格助詞を用いない無助詞の形で表されるのが典型的である。さらに、名詞の末尾母音を長音化した形も用いられる。(38) が無助詞の例、(39) が=o の例、(40) が長音化の例である。なお、長音化は目的語名詞の末尾がどの母音の場合でも起こりうる。

- (38) *taroga* *ts̄ȳkue* *m̄gakaetaga:.*
taro=ga *cukue* *megakai-ta=ga*
 太郎=NOM 机.ACC 壊す-PST=SFP
 「太郎が机を壊したよ」
- (39) *taro:ga* *orao* *mit̄o:.*
taroR=ga *ora=o* *mi-cjor-u*
 太郎=NOM 1SG=ACC 見る-IPFV-NPST
 「太郎が俺を見ている」
- (40) *taro:wa* *ots̄ino* *sara:* *m̄gakaeta.*
taroR=wa *oci=no* *saraR* *megakai-ta*
 太郎=TOP うち=GEN 皿.ACC 壊す-PST
 「太郎はうちの皿を壊した」

これら3種類の対格がどのような分布をなすかについては、網羅的な調査を終えることができてはいない。現段階では、特に=0の分布には、名詞句の有生性階層が関わっていると考えられる。具体的には、以下の(41)のように目的語の有生性階層が高い(1人称代名詞)場合には、=0が用いられやすく、逆に(42)のように階層が低い場合(動物名詞)には、=0が用いられない傾向にある。

- (41) *taro:ga ora miŋeo:.*
taroR=ga ora=o mi-cjor-u
 太郎=NOM 1SG=ACC 見る-IPFV-NPST
 「太郎が俺を見ている」(=(39))
- (42) *ora {tori/ *torio} katto:.*
*ora {tori/ *tori=o} kaQ-cjor-u*
 1SG {鳥 / 鳥=ACC} 飼う-IPFV-NPST
 「俺は鳥を飼っている」

4.5 与格 =ni

与格は=niによって標示され、間接目的語を表す。(43)では「授与の相手」が、(44)では「変化の結果」が、(45)では「使役の動作主」が、(46)では「受身の動作主」がそれぞれ与格で標示されている。

- (43) *taro:wa oto:toni waga e: jatta.*
taroR=wa otoRto=ni waga eR jaQ-ta
 太郎=TOP 弟=DAT 1SG.GEN 家 やる-PST
 「太郎は弟に自分の家をやった」
- (44) *taro:wano: eeneeni nattagena.*
taroR=wa=no seNse=ni naQ-ta=gena
 太郎=TOP=CNF 先生=DAT なる-PST=HS
 「太郎はな、先生になったそうだ」
- (45) *taro:wa oto:toni meŋi kʷaet̃eo:.*
taroR=wa otoRto=ni mesi kuw-ase-cjor-u
 太郎=TOP 弟=DAT 飯 食う-CAUS-IPFV-NPST
 「太郎は弟に飯を食わせている」
- (46) *taro:wa daremmoni s̄kaet̃eo:.*
taroR=wa dareNmo=ni suk-ae-cjor-u
 太郎=TOP みんな=DAT 好く-PASS-IPFV-NPST
 「太郎はみんなに好かれている」

4.6 所格 =ni / =de

所格は=ni (=N で現れる場合もある) および=de で表され, =ni が (47) のように「存在の場所」を, =de が (48) のように「動作の場所」を表す。

- (47) *taro:wa mo zu:tto to:k'io:ni o:zi.*
taroR=wa mo zuQto toRkjoR=ni or-u=zi
 太郎=TOP もう ずっと 東京=LOC いる-NPST=SFP
 「太郎はもうずっと東京にいるよ」

- (48) *taro:wa ede jasundzō: ga.*
taroR=wa e=de jasuN-zjor-u=ga
 太郎=TOP 家=LOC 休む-IPFV-NPST=SFP
 「太郎は家で休んでいるよ」

4.7 方向格 =ni / =e

方向格は=ni (=N で現れる場合もある) および=e が表す。表す意味役割は, 動作の「方向」や「着点」である。以下の (49) では, =ni と=e がどちらも使える。(50) から (52) では「着点」が =ni と=e の両方で表されている。

- (49) *taro: {oto:toni / oto:toe} koe kaketa.*
taroR {otoRto=ni / otoRto=e} koi kake-ta
 太郎 {弟=ALL / 弟=ALL} 声 かける-PST
 「太郎は弟に声をかけた」

- (50) *taro:wano: to:k'ioi ik'itaga.*
taroR=wa=no toRkjo=e ik-ita=ga
 太郎=TOP=CNF 東京=ALL 行く-PST=SFP
 「太郎はな, 東京へ行ったよ」

- (51) *isin suware.*
isu=N suwar-e
 椅子=ALL 座る-IMP
 「椅子に座れ」

- (52) *taro:wa isię suwatta.*
taroR=wa isu=e suwaQ-ta
 太郎=TOP 椅子=ALL 座る-PST
 「太郎は椅子に座った」

4.8 具格 =de

具格の=deは、「手段」を表す。(53)では「茶碗を洗う」という意志的動作,(54)では「指を切る」という非意志的動作の手段を=deで表している。

- (53) *taro:wa* *teawan* *siido:de* *aratteo:.*
taroR=wa *cjawaN* *suidoR=de* *araQ-cjor-u*
 太郎=TOP 茶碗 水道=INST 洗う-IPFV-NPST
 「太郎は茶碗を水道で洗っている」

- (54) *taro:wa* *po:teo:de* *ibi* *k'itta.*
taroR=wa *hoRcjoR=de* *ibi* *kiQ-ta*
 太郎=TOP 包丁=INST 指 切る-PST
 「太郎は包丁で指を切った」

4.9 共格 =to

共格の=toは、以下の(55)のように動作を共同で行う相手や,(56)のように相互的な動作の相手を表す。

- (55) *taro:wa* *oto:toto* *asondzo:.*
taroR=wa *otoRto=to* *asoN-zjor-u*
 太郎=TOP 弟=COM 遊ぶ-IPFV-NPST
 「太郎は弟と遊んでいる」

- (56) *taro:wa* *oto:toto* *kenka* *si'teo:.*
taroR=wa *otoRto=to* *keNka* *si-cjor-u*
 太郎=TOP 弟=COM 喧嘩 する-IPFV-NPST
 「太郎は弟と喧嘩している」

次の例のように、他の名詞と並列的に用いることもできる。(57)では、=toが *taroR* と *otoRto* をつないでいる。

- (57) *taro:to* *oto:toga* *asobin* *itta.*
taroR=to *otoRto=ga* *asob-i=N* *iQ-ta*
 太郎=COM 弟=NOM 遊ぶ-INF=ALL 行く-PST
 「太郎と弟が遊びに行った」

4.10 奪格 =kara

奪格の=kara は、移動の出発点や出どころといった起点を表す。(58) は移動の出発点, (59) は出どころである。

- (58) *taro:wa* *otsikara* *sotoe* *deta.*
taroR=wa *oci=kara* *soto=e* *de-ta*
 太郎=TOP 家=ABL 外=ALL 出る-PST
 「太郎は家から外へ出た」
- (59) *taro:wano:* *ojakara* *zeni* *morattatoja.*
taroR=wa=no *oja=kara* *zeni* *moraQ-ta=taja*
 太郎=TOP=CNF 親=ABL 銭 もらう-PST=HS
 「太郎はな, 親から金をもらったらしい」

=kara は与格の=ni と同様に, 受身の動作主も表すが, 疑似受身(受身の接辞を付加しない語彙的な受身)の動作主の場合は使えない。(60) は, job-「呼ぶ」に受身接辞の -ae- が付加されており, 動作主である「警察」に=kara がつくが, (61) の *cukamar-*「捕まる」のように, 語彙的な意味の中に受身の意味合いがあるものが述語の場合, 動作主が=kara で表せない。

- (60) *taro:wano:* *ke:satsukara* *jobaetagenawa.*
taroR=wa=no *keRsacu=kara* *job-ae-ta=gena=wa*
 太郎=TOP=CNF 警察=ABL 呼ぶ-PASS-PST=HS=SFP
 「太郎はな, 警察から呼ばれたらしいよ」
- (61) *taro:wano:* {*ke:satsuni* / **ke:satsukara*} *tsukamattagena.*
taroR=wa=no {*keRsacu=ni* / **keRsacu=kara*} *cukamaQ-ta=gena*
 太郎=TOP=CNF {警察=DAT / 警察=ABL} 捕まる-PST=HS
 「太郎はな, 警察に捕まったらしい」

4.11 限界格 =made

限界格の=made は, 限界点を表す。

- (62) *taro:wa* *otsimade* *aruite* *inda.*
taroR=wa *oci=made* *arui-te* *iN-da*
 太郎=TOP 家=LMT 歩く-SEQ 帰る-PST
 「太郎は家まで歩いて帰った」

4.12 比格 =jori / =joma

=jori および=joma は、比較対象を表すのに用いられる。両者がどのように異なるかは未調査である。

- (63) *taro:wa* *oto:tojo:* *εega* *take.*
taroR=wa *otoRto=jori* *se=ga* *taka-i*
太郎=TOP 弟=CMP 背=NOM 高い-NPST
「太郎は弟より背が高い」
- (64) *ora* *ko:joma* *ko:ga* *i:wa.*
ora *kore=joma* *kore=ga* *i-i=wa*
1SG これ=CMP これ=NOM 良い-NPST=SFP
「俺はこれよりこれがいい」

5. 動詞の形態論

本節の内容は、主に平子・友定 (2018) に拠るところが大きい。

5.1 屈折形態論

動詞の屈折を、以下の表 13 に示す。屈折形は、文終止の観点から終止類と接続類の 2 つに大別できる。

動詞は、語幹の形によって、子音語幹動詞、母音語幹動詞、不規則変化動詞の 3 種類に大きく分けられる。子音語幹動詞は、語幹が子音で終わる動詞で、語幹末子音には *k, s, g, n, b, m, c, r, w* の 9 種類である。このうち、*tac-*「立つ」などの語幹末子音が *c* のものは、後接する接辞によって *c* が *t* に交替することがある。たとえば、非過去形は *tac-u* だが、命令形は *tat-e* のようになる。また、語幹末子音が *n* の動詞は、*sin-*「死ぬ」と *in-*「往ぬ (去る)」の 2 つのみで、他の子音語幹動詞と一部異なった語形変化をする。

母音語幹動詞は、*oki-*「起きる」や *ne-*「寝る」のように、語幹末が *i* か *e* で終わる。ただし、一部の語形において、*okir-aN* ‘起きる-NEG’ や *ner-aN* ‘寝る-NEG’ のように、*r* 語幹に交替することがある (いわゆる「ラ行五段化」)。

不規則変化動詞は、*ku-*「来る」と *su-*「する」の 2 種類である。この 2 つの動詞は複数の語幹を持ち、子音語幹と母音語幹が入り混じっている。「来る」は母音語幹動詞と同様に、一部が *r* 語幹化している。

表 13 動詞の屈折形式

		子音語幹動詞 「書く」	子音語幹動詞 「往ぬ」	母音語幹動詞 「見る」	不規則動詞 「来る」	不規則動詞 「する」	
終 止 類	非過去	肯定	kak-u	in-uru in-oru	mi-ru	ku-ru su-ru	
		否定	kak-aN	in-aN	mi-N mir-aN	ko-N kor-aN sa-N	
	過去	肯定	kai-ta	iN-da	mi-ta	ki-ta	si-ta
		否定	kak-adaQta	in-adaQta	mi-daQta mir-adaQta	ko-daQta kor-adaQta	se-daQta
	意志		kak-a	in-a	mi-jo mir-a	kor-a	sa
	命令		kak-e	in-e	mi-R mir-e	ko-i	se-R
接 続 類	中止		kai-te	iN-de	mi-te	ki-te	si-te
	条件 1		kak-ja	in-ja	mi-rja	ku-rja	su-rja
			kak-a	in-a	mir-a	kur-a	s-a
条件 2		kai-tara	iN-dara	mi-tara	ki-tara	si-tara	

5.1.1 テンス

屈折接辞の -(r)u と -ta はテンスにより非過去形と過去形で対立する。非過去形は、子音語幹に -u を、母音語幹に -ru をつけて作る。ただし、n 語幹動詞の場合のみ、-uru または -oru がつき、in-uru, in-oru ‘往ぬ-NPST’ のようになる。また、語幹末子音が m や b の場合、nom-u 「飲む」のように -u がついた形だけでなく、mu が撥音化した noN のような形にもなる。(65) は nom- 「飲む」、(66) は korob- 「倒れる」の例である。

- (65) *omae tokono ojaziwa maeban sake noŋkae.*
omai toko=no ojazi=wa maibaN sake noN=kai
 2SG 所=GEN 父=TOP 毎晩 酒 飲む.NPST=Q

「おまえのおやじは毎晩酒を飲むか」

- (66) *k'iga koronwa:.*
ki=ga koroN=wa
 木=NOM 倒れる.NPST=SPF

「(木が次々に倒れていく様子を見て) 木が倒れるぞ」

過去肯定形は、語幹に *-ta* をつけて作る。このとき、子音語幹動詞は、語幹が異なる形（音便形）に交替する。この交替規則は語幹末子音ごとに決まっている（詳細は 5.2 で記述する）。過去形は、基本的には述語の事態が発話時よりも過去の場合に使用されるが、過去形が聞き手に対する命令を表す際に用いられることもある。特に、*gos-*「くれる」の場合に顕著であり、以下の (67) のように聞き手への依頼表現に用いられる（(67) における *goi-* は、*gos-* の音便形である）。

- (67) *phi:* *ts̄ikete* *goita.*
 hiR *cuke-te* *goi-ta*
 火.ACC つける-SEQ くれる-PST
 「火をつけてくれ」

5.1.2 肯否

屈折接辞 *-(r)u* は、肯否において *-aN* と対立する。否定形は、子音語幹に *-aN*、母音語幹に *-N* を後接して作る。ただし、*mi-*「見る」などの母音語幹動詞と「来る」は *r* 語幹化して *mir-aN* や *kor-aN* といった形をとることもある。「する」の場合は *se-N* と *sa-N* の 2 通りの形がある。

また、「～しはしない」に相当するとりたて否定形もある。この形は、*kak-a#se-N*、*kak-ja#se-N* のように表す迂言的な形である。

過去否定形は、子音語幹に *-adaQta*、母音語幹に *-daQta* を後接させて作る。母音語幹動詞と「来る」において *r* 語幹化するのは、非過去形の場合と同じである。「する」の場合は、*sa* という語幹はとらない。(68) では、拡張語幹 *ik-are-* に *-daQta* が後接している

- (68) *teŋkiga* *warite* *ikaredatta.*
 teNki=ga *waru-te* *ik-are-daQta*
 天気=NOM 悪い-SEQ 行く -POT-NEG.PST
 「天気が悪くて行けなかった」

なお、以下の (69) のような *-NdaQta* という形になることもあるようである。否定の意味を意識したために *N* が現れたものと思われる。

- (69) *jo:* *k̄ikoendattadomo* *da:ga* *hasitt̄eottakane.*
 joR *kikoe-NdaQta=domo* *dare=ga* *hasiQ-cjoQ-ta=kane*
 良い-INF 聞こえる-NEG.PST=CNC 誰=NOM 走る-IPFV-PST=Q
 「よく聞こえなかったけど、誰が走っていたの？」

5.1.3 ムード

-(r)u による基本形は、ムードにおいて意志形や命令形と対立する。意志形は、子音語幹および r 化語幹に -a を、母音語幹に -jo を後接させて作る。「する」は sa という形をとる。kak-aR ‘書く-VOL’ のように -a が長音化することもあるが、この長音は任意の要素のようである。意志形は意志および勧誘を表し、=ka, =ja, =koi などの終助詞が後接することがある。特に、=ja と=koi がつくると勧誘の意味に解釈される。(70) は=ja がついた例、(71) は=koi がついた例である。なお、意志形が推量を表すこともあるようだが、古い用法と考えられ、現在では=dara を用いる (6.2 参照) のが一般的である。

- (70) *haja haja kokoe k̄ite iεɛɔni sake noma:ja.*
haja haja koko=e ki-te iQsjoni sake nom-aR=ja
 早い.INF 早い.INF ここ=ALL 来る-SEQ 一緒に 酒 飲む-VOL=SFP
 「早く早く、ここへ来て一緒に酒を飲もうよ」
- (71) *haja haja kokoi k̄ite iεɛɔni noma:koi.*
haja haja koko=i ki-te iQsjoni nom-aR=koi
 早い.INF 早い.INF ここ=ALL 来る-SEQ 一緒に 飲む-VOL=SFP
 「早く早く、ここへ来て一緒に飲もうよ」

命令形は、子音語幹に -e をつけ、母音語幹の末尾母音を伸ばして作る。母音語幹動詞の場合は、r 語幹化した mir-e のような形も用いられる。ただし、命令形においては「来る」が r 語幹化せず、ko-i という形をとる。ただし、5.3.4 で後述するように、尊敬の派生接辞 -aQsjar- や -(i)nahar- は子音語幹を派生するが、命令形になる場合、屈折接辞 -e をとるのではなく、-aQsjai や -(i)nahai といった形になる。

5.1.4 中止形

中止形は、語幹に -te を接続するもので、子音語幹動詞は音便語幹をとる (5.2 参照)。中止形は、文を切ったり、補助動詞が続いたりする際に使用される。以下にいくつか例を示す。

- (72) *daekoga hajaete a:.*
daiko=ga hajai-te ar-u
 大根=NOM 切る-SEQ ある-NPST
 「大根が切っている」
- (73) *εencega hoō jonde gosaeta.*
seNse=ga hoN joN-de gos-ae-ta
 先生=NOM 本 読む-SEQ くれる-HON-PST
 「先生が本を読んでもらった」

- (74) *okka: s̄ite kodomono omot̄ea meḡakaete simatta.*
oQkari si-te kodomo=no omocja megakai-te simaQ-ta
 うっかり する-SEQ 子ども=GEN おもちゃ 壊す-SEQ しまう-PST
 「うっかりして子どものおもちゃを壊してしまった」

5.1.5 条件形

屈折接辞による条件形は -(j)a と -tara の 2 種類がある。2 つの形式の詳しい意味の違いは明らかになっていないが、どちらも条件（仮定）を表す。(75) が -ja の例、(76) が -tara の例である。子音語幹動詞に -tara がつく場合、音便語幹 (5.2) をとる。

- (75) *nani kujja i:kane.*
nani kuw-ja i-i=kane
 何 食う-CND 良い-NPST=Q
 「何を食えばいいのか」

- (76) *oraga taoretara cewa eite gocejo.*
ora=ga taore-tara sewa si-te gos-e=jo
 1SG=NOM 倒れる-CND 世話 する-SEQ くれる-IMP=SFP
 「俺が倒れたら、世話してくれよ」

上の例のように、条件形は普通文終止せずに従属節になるが、次の例のように、疑問文の文末に条件形が立ち、文を終止することがある。

- (77) *k'owa tejk'imo i:ga omae doko ik'a:.*
kjo=wa teNki=mo i-i=ga omai doko ik-jaR
 今日=TOP 天気=ADT 良い-NPST=CNC 2SG どこ 行く-CND
 「今日は天気もいいが、おまえはどこに行くんだ」

- (78) *k'owa era i: kakko eit̄eoimaskedo doko ikaεεara:.*
kjo=wa era i-i kaQko si-cjor-imas-u=kedo doko ik-aQsjar-aR
 今日=TOP えらい.INF 良い-NPST 格好 する-IPFV-POL-NPST=CNC どこ 行く-HON-CND
 「今日はとてもいい格好をしています、どこへ行かれるか」

(77) では ik-「行く」に、(78) では ik-aQsjar-「行く-HON」に -(j)aR が後接して条件形を作り、そこで文が終止している。このような疑問文は、話者によるとぞんざいな物言いとのことだが、詳細は明らかになっていない。

5.2 子音語幹動詞音便形

子音語幹動詞に、過去の *-ta*、中止の *-te*、条件の *-tara* などが続く場合、語幹の形が異なる。この形は語幹末子音によって決まっており、以下のように整理できる。

表 14 語幹末子音ごとの音便形

語幹末子音	語例	過去形	語幹の作り方
k	kak-u 「書く」	kai-ta	k を i にする
s	das-u 「出す」	dai-ta	s を i にする
g	kag-u 「嗅ぐ」	kai-da	g を i にして接辞頭の t が d になる
n	in-uru 「去る」	iN-da	n を N にして接辞頭の t が d になる
b	tob-u 「飛ぶ」	toN-da	b を N にして接辞頭の t が d になる
m	nom-u 「飲む」	noN-da	m を N にして接辞頭の t が d になる
t/c	tac-u 「立つ」	taQ-ta	c を Q にする
r	kir-u 「切る」	kiQ-ta	r を Q にする
w	kaw-u 「買う」	kaQ-ta	w を Q にする

これらは交替した語幹の語幹末の形によって 3 つに分けられる。すなわち、語幹末が i になるイ音便、N（撥音）になる撥音便、Q（促音）になる促音便の 3 つである。このうち、ik-「行く」は語幹末が k だが、他の k 語幹動詞とは異なり、iQ-ta のような促音便形か、ik-ita のような語幹に *-ita* がついた形になる。*-te* や *-tara* が続く場合も同様である。

- (79) *k^hino:wa doko ik^hita.*
kinoR=wa doko ik-ita
 昨日=TOP どこ 行く-PST
 「昨日はどこへ行った」

5.3 派生形態論

子音語幹動詞「書く」、母音語幹動詞「見る」、不規則変化動詞「来る」「する」がとる派生接辞を、非過去の屈折形になる場合を例に以下の表 15 に示す（「往ぬ」は子音語幹動詞に含める）。母音語幹動詞と「来る」に関しては、派生形においても r 語幹化した形がある。具体的には、使役、受身、可能、尊敬の派生接辞が後接する場合に r 語幹化が起こる。

表 15 動詞の派生形式

	書く	見る	来る	する
使役	kak-ase-ru	mi-sase-ru mir-ase-ru	ko-sase-ru kor-ase-ru	s-ase-ru
受身	kak-are-ru kak-ae-ru	mir-are-ru mir-ae-ru	kor-are-ru kor-ae-ru	s-are-ru
可能	kak-are-ru kak-ae-ru kak-e-ru	mir-are-ru mir-ae-ru	kor-are-ru kor-ae-ru	s-are-ru
尊敬	kak-are-ru kak-ae-ru kak-aQsjar-u kak-inahar-u	mir-are-ru mir-ae-ru mir-aQsjar-u mi-nahar-u	kor-are-ru kor-ae-ru kor-aQsjar-u ki-nahar-u	s-are-ru s-aQsjar-u si-nahar-u
丁寧	kak-imas-u	mi-mas-u	ki-mas-u	si-mas-u
非完成	kai-cjor-u kai-tor-u	mi-cjor-u mi-tor-u	ki-cjor-u ki-tor-u	si-cjor-u si-tor-u
願望	kak-ita-i	mi-ta-i	ki-ta-i	si-ta-i

5.3.1 使役

-ase-, -sase- は母音語幹を派生し、使役の意味を表す。「許可」と「強制」のどちらの場合も述語の形は変わらない。(80) が「許可」, (81) と (82) が「強制」の例である。

- (80) *ikitete ju:daken kentani ikaeta.*
ik-ita-i=te juw-u=dakeN keNta=ni ik-ase-ta
 行く-DES=QT 言う-NPST=CSL ケンタ (人名) =DAT 行く-CAUS-PST

「行きたいと言うから、ケンタに行かせた」

- (81) *kentao mo:jari ikaeta.*
keNta=o morijari ik-ase-ta
 ケンタ (人名) =ACC 無理やり 行く-CAUS-PST

「ケンタを無理やり行かせた」

- (82) *kentani mo:jari ikaeta.*
keNta=ni morijari ik-ase-ta
 ケンタ (人名) =DAT 無理やり 行く-CAUS-PST

「ケンタに無理やり行かせた」

上の (81) と (82) からわかるように、使役の動作主（上の場合は「ケンタ」）は、対格の=ο あるいは与格の=ni でマークされる。

また、一部の動詞においては、-akas- によって使役の意味が表されることがある。たとえば、「腐る」を使役の意味で表すのに、(84) のような *kusar-ase-* だけでなく (83) のような *kusar-akas-* が用いられている（イ音便で *kusar-akai* となっている）。

- (83) *taro:wa nagẽtcoiṭe jasae kɯsarakaeta.*
taroR=wa nage-cjoi-te jasai kusar-akai-ta
 太郎=TOP 投げる-おく-SEQ 野菜 腐る-CAUS-PST

「太郎は放っていて野菜を腐らせた」

- (84) *taro:wa jasae kɯsaraceta.*
taroR=wa jasai kusar-ase-ta
 太郎=TOP 野菜 腐る-CAUS-PST

「太郎は野菜を腐らせた」

他にも、以下の (85) と (86) のように、*meg-*「壊す」と *meg-akas-*「壊す」のペアも確認された。

- (85) *taro:ga omot̃ea me:da.*
taroR=ga omocja mei-da
 太郎=NOM おもちゃ 壊す-PST

「太郎がおもちゃを壊した」

- (86) *okka: kodomono omot̃ea meḡakaeta.*
oQkari kodomo=no omocja meg-akai-ta
 うっかり 子ども=GEN おもちゃ 壊す-CAUS-PST

「うっかり子どものおもちゃを壊した」

(83) とあわせて考えると、逆使役のようなものかもしれないが、詳細は未調査である。なお、*kake-ru* と *kake-rakas-u*（どちらも「走る」）のペアもあり、これは使役や逆使役では説明がつかない。

5.3.2 受身

受身の派生接辞は、-ae- および -are- で、これらの接辞は母音語幹を派生する。母音語幹動詞と「来る」は r 語幹化して *mir-a(r)e-*, *kor-a(r)e-* のようになる。以下のように、直接受身と間接受身のどちらの文も作ることができる。(87) が直接受身、(88) が間接受身の例である。

- (87) *taro.wa ɛnɛni naguraeta.*
taroR=wa sense=ni nagur-ae-ta
 太郎=TOP 先生=DAT 殴る-PASS-PST
 「太郎は先生に殴られた」
- (88) *rɛ:zo:kono kʷasi oto:toni kʷaeta.*
reRzoRko=no kwasi otoRto=ni kuw-ae-ta
 冷蔵庫=GEN 菓子 弟=DAT 食う-PASS-PST
 「冷蔵庫の菓子を弟に食われた」

5.3.3 可能

可能形は受身形と同形で、-a(r)e- を後接させて作る。ただし、子音語幹動詞には、*kak-ae-* のように -a(r)e- を後接させた形と、*kak-e-* のように -e- を後接させた形（いわゆる可能動詞）がある。どちらの接辞も母音語幹を派生し、以下の (89) のような能力可能と、(90) のような状況可能のどちらでも使用することができる。なお、この -a(r)e- を含む派生接辞によって母音語幹が派生された場合、派生接辞がつかない *mi-*「見る」などの母音語幹と違って、*r* 語幹化は起こらない。そのため、以下の (89) や (90) において、*ik-arer-aN* や *ik-er-aN* といった形はとらない。

- (89) *karadaga jowate ɛmpomadɛ {ikaren / iken}.*
karada=ga jowa-te eNpo=made {ik-are-N / ik-e-N}
 体=NOM 弱い-SEQ 遠方=LMT 行く-POT-NEG
 「体が弱くて遠方まで行けない」
- (90) *amega φᵛtt̃eo:de ikaren.*
ame=ga huQ-cjor-u=de ik-are-N
 雨=NOM 降る-IPFV-NPST=CND 行く-POT-NEG
 「雨が降っていて行けない」

否定の場合、*jo*（「良い」の連用形と思われる）を用いて可能を表すことができる。この場合、*jo* と共起する述語に可能の接辞があってもなくても成立するようである。たとえば、以下の (91) から (93) では、いずれも *jo* が用いられているが、(91) と (93) では述語に可能接辞を含む一方、(92) では可能接辞を含まない。しかし、いずれも（不）可能の意味を表す文である。

- (91) *karadaga jowate sogʷan ɛmpomade jo iken.*
karada=ga jowa-te sogjaN eNpo=made jo ik-e-N
 体=NOM 弱い-SEQ そんな 遠方=LMT 良い-INF 行く-POT-NEG
 「体が弱くてそんな遠くまで行けない」

- (92) *to:kumade jo ikan.*
toRku=made jo ik-aN
 遠く=LMT 良い.INF 行く-NEG
 「遠くまで行けない」
- (93) *tenkiga warite jo ikaredatta.*
teNki=ga waru-te jo ik-are-daQta
 天気=NOM 悪い-SEQ 良い.INF 行く-POT-NEG.PST
 「天気が悪くて行けなかった」

5.3.4 尊敬

主語名詞句を上位待遇する尊敬の派生接辞の1つに、受身・可能と同形の *-a(r)e-* がある。

- (94) *kansanga orare:.*
kaN-saN=ga or-are-ru
 神-TTL=NOM いる-HON-NPST
 「神様がいらっしゃる」

(94) では、*-are-* に続く屈折接辞 *-ru* においてラ行子音隠在現象が起こり、*[orare:]* という形で実現しているが、尊敬接辞の *-ae-* の場合、次の (95) のように *-ru* が脱落しても長音が残らないことがある。

- (95) *ano si:ja^hsino namaeo si^hteoraekaene:.*
ano siR-jaci=no namae=o siQ-cjor-ae-ru=kai=ne
 あの 人-PL=GEN 名前=ACC 知る-IPFV-HON-NPST=Q=SFP
 「あの人たちの名前を知っていらっしゃるかね」

(95) では、*-ae-ru* の *ru* が脱落した分の長音がなく、*-ae* だけで非過去も表されるような形になっている。

このほかに、尊敬接辞には *-aQsjar-* と *-(i)nahar-* がある。*-aQsjar-* が母音語幹動詞および「来る」に接続する場合、*r* 語幹化して *mir-aQsjar-*、*kor-aQsjar-* のようになる。「する」に接続する場合、語幹は *s* となり、*s-aQsjar-* という形をとる。*-(i)nahar-* は、子音語幹動詞には *-inahar-* の形で、母音語幹動詞や「来る」「する」には *-nahar-* の形で接続して、*r* 語幹化はしない。*-aQsjar-* と *-(i)nahar-* はどちらも語幹末子音が *r* の子音語幹を派生するが、命令形が通常の *r* 語幹動詞とは異なり、*-Qsjai*、*-nahai* のような形になる。

(96) *tomodaŋeiga taoretara teanto ewa eite jaraeaeajo.*
tomodaci=ga taore-tara cjaNto sewa si-te jar-aQsjai=jo
 友達=NOM 倒れる-CND ちゃんと 世話 する-SEQ やる-HON.IMP=SFP
 「友達が倒れたら、ちゃんと世話してやりなさいよ」

(97) *enŋe kore teokko mite gosinahaŋe.*
seNse kore cjoQko mi-te gos-inahai
 先生 これ ちょっと 見る-SEQ くれる-HON.IMP
 「先生、これをちょっと見てください」

(96) は -aQsjai の例, (97) は -inahai の例である。どちらも -aQsjar-e, -inahar-e のようにはならない。

また、尊敬語というほどの待遇の高さはないようだが、待遇に関わる形式として -te (=da) がある。中止形の -te と同じ形式で、=da はコピュラ (6.2) とみられる。過去形は -cjaQta になる。

(98) *omae tokono otottsanza maeban sake nondedara.*
omai toko=no o-toQcaN=wa maibaN sake noN-de=dara
 2SG 所=GEN POL-父さん=TOP 毎晩 酒 飲む-SEQ=COP.INFR
 「おまえのところのお父さんは毎晩酒を飲むだろう」

(99) *ima otsiŋiwa okakaga otteda.*
ima oci=ni=wa o-kaka=ga oQ-te=da
 今 家=LOC=TOP POL-母=NOM いる-SEQ=COP.NPST
 「今、家にはお母さんがいる」

(100) *okakaga kare: kossaeŋeatajo.*
o-kaka=ga kareR koQsae-cjaQta=jo
 POL-母=NOM カレー こしらえる-HON.PST=SFP
 「お母さんがカレーを作ったよ」

話者によると、これらの表現は、敬語というほどの敬意の高さはないが、たとえば上の (100) の「お母さん」が「弟」になると koQsae-cjaQta ではおかしくなるという。

なお、主語への上向きの待遇ではなく、卑罵・軽卑的な待遇を表す -(i)sagar- という形式もある。-aQsjar- や -(i)nahar- と同様に子音語幹を派生し、(102) のように命令形でも用いられる。

(101) *aiŋsuga ke: iran koto cisagattekarani.*
aici=ga keR ir-aN koto si-sagaQ-te=karani
 あいつ=NOM CNF 要る-NEG こと する-DRG-SEQ=SFP
 「あいつがいらんことをしやがった」

- (102) *muko:* *ik^sisagare.*
mukoR *ik-isagar-e*
 向こう 行く-DRG-IMP
 「向こうへ行きやがれ」

5.3.5 丁寧

聞き手に対する配慮を表す丁寧形は、-(i)mas- によって形成され、子音語幹を派生する。s 語幹だが、音便形(5.2節)はとらない。以下の(103)では、-mas- に過去接辞 -ita が後接しているが、s 語幹動詞のように -mai-ta とはならず、-mas-ita の形をとる。

- (103) *so:no* *sigotowa* *da:ga* *saemasikane.*
sore=no *sigoto=wa* *dare=ga* *s-ae-mas-u=kane*
 それ=GEN 仕事=TOP 誰=NOM する-HON-POL-NPST=Q
 「その仕事は誰がされますか」

5.3.6 アスペクト

完成相は無標で、非完成相は -cjour- で表され、-cjour- は子音語幹を派生する。子音語幹動詞に接続する際には、-ta や -te と同様に、語幹の交替がある。語幹末子音が g, n, b, m の場合、-ta や -te が -da や -de となるのと同様に、-cjour- は -zcjour- となる。なお、-cjour- は進行と結果のどちらでも使用される。次の(104)は進行の例で、(105)は結果の例である。あまり使用頻度が高いわけではないようだが、(106)のように -tor- という形式も用いられる。

- (104) *kodomoga* *aruⁱiteo.wa.*
kodomo=ga *arui-cjour-u=wa*
 子ども=NOM 歩く-IPFV-NPST=SFP
 「子どもが歩いているよ」
- (105) *kiga* *korondzo.wa.*
ki=ga *koron-zjour-u=wa*
 木=NOM 倒れる-IPFV-NPST=SFP
 「木が倒れているよ」
- (106) *basu* *matto.wana.*
basu *maQ-tor-u=wa=na*
 バス 待つ-IPFV-NPST=SFP=SFP
 「バスを待っているよ」

5.3.7 願望

願望を表す *-(i)ta-* は、形容詞語幹を派生し、*-i* などの屈折接辞をとる。その際、*ai* が融合して *-te* となることがある。

- (107) *kog'ian epi sumitae.*
kogjaN e=ni sum-ita-i
こんな 家=LOC 住む-DES-NPST
「こんな家に住みたい」

5.4 存在動詞

存在動詞には、*ar-* と *or-* があり、主語が無生の場合は *ar-* が、有生の場合は *or-* が用いられる。以下の (108) では、無生物「病院」の存在を *ar-* が表し、(109) と (110) ではそれぞれ有生の「馬」「孫」の存在を *or-* が表している。

- (108) *asokoni bjo:inga a:.*
asoko=ni bjoRiN=ga ar-u
あそこ=LOC 病院=NOM ある-NPST
「あそこに病院がある」
- (109) *asokono φurobani omaga o.wa.*
asoko=no hiroba=ni oma=ga or-u=wa
あそこ=GEN 広場=LOC 馬=NOM いる-NPST=SFP
「あそこの広場に馬がいるよ」
- (110) *k'o:wa ieni magoga o:.*
kjoR=wa ie=ni mago=ga or-u
今日=TOP 家=LOC 孫=NOM いる-NPST
「今日は家に孫がいる」

このように、無生物名詞の存在を表す場合には *or-* ではなく *ar-* が用いられるが、次の例のように *or-* を用いることもある。

- (111) *takusi:ga o:kana.*
takusiR=ga or-u=kana
タクシー=NOM いる-NPST=Q
「タクシーがいるかな」

(111) は、駅から出てすぐに乗れるタクシーが待機しているかどうかという内容である。このように、動く物体であれば *or-* が使えることもある。

また、存在動詞 *ar-* および *or-* は、主語の存在だけでなく、以下の (112)(113) のように所有を表すこともできる。

- (112) *wæa:* *kuruma:ga* *nide:* *a:*
wasi=wa *kuruma=ga* *ni-dai* *ar-u*
 1SG=TOP 車=NOM 二-台 ある-NPST
 「私は車が二台ある（持っている）」

- (113) *φutarino* *magoga* *o:*
hutari=no *mago=ga* *or-u*
 二人=GEN 孫=NOM いる-NPST
 「二人の孫がいる」

or- の否定形は、他の *r* 語幹動詞と同様に接辞 *-aN* が後接して *or-aN* となるが、*ar-* は *ar-aN* とはならず、形容詞の *na-* (*ne*) を用いる。

- (114) *asokono* *φirobaŋa:* *omaga* *oran.*
asoko=no *hiroba=ni=wa* *oma=ga* *or-aN*
 あそこ=GEN 広場=LOC=TOP 馬=NOM いる-NEG
 「あそこの広場には馬がない」

- (115) *kokon* *tokoniwa* *bio:inga* *ne.*
koko=N *toko=ni=wa* *bjorIN=ga* *na-i*
 ここ=GEN ところ=LOC=TOP 病院=NOM ない-NPST
 「このあたりには病院がない」

ただし、*ar-* もとりたて否定形の *ar-a#seN* という形にはなる。ただし、話者の 1 人によると、このとき [araseN] ではなく [a:seN] で実現するという。

6. 形容詞・コピュラ形態論

6.1 形容詞の屈折形態論

形容詞の屈折を、語幹末母音ごとに分けて以下の表に示す。語幹末が *e* の語は *i* の語に準ずるものとする。

表 16 形容詞の屈折形式

			高い	涼しい	暑い	白い
終 止 類	非過去	肯定	taka-i take	suzusi-i suzusi	noku-i noku	siro-i sire
		否定	taka-ne	suzusi-ne	noku-ne	siro-ne
	過去	肯定	taka-kaQ-ta	suzusi-kaQ-ta	noku-kaQ-ta	siro-kaQ-ta
		否定	taka-na-kaQ-ta	suzusi-na-kaQ-ta	noku-na-kaQ-ta	siro-na-kaQ-ta
接 続 類	連用		taka taka-ni	suzusi suzusi-ni	noku noku-ni	siro siro-ni
	中止		taka-te	suzusi-te	noku-te	siro-te
	条件 1		taka-kerja taka-kera	suzusi-kerja suzusi-kera	noku-kerja noku-kera	siro-kerja siro-kera
	条件 2		taka-kaQ-tara	suzusi-kaQ-tara	noku-kaQ-tara	siro-kaQ-tara

6.1.1 終止類

肯定非過去形は、語幹に *-i* が接続した形、および語幹末母音と *-i* が連母音融合した形をとる。たとえば、次の (116) のように *taka-*「高い」であれば、語幹に *-i* が後接した *taka-i* と、*ai* が融合して *e* となった *take* の両方が用いられる。本稿では、どちらも基底では *taka-i* と分析する。

- (116) *taro:wa oto:tojo: ɛga {takae / take}.*
taroR=wa otoRto=jori se=ga taka-i
 太郎=TOP 弟=CMP 背=NOM 高い-NPST
 「太郎は弟より背が高い」

同様に、語幹末が *u* の *noku-*「暑い」は *-i* が融合して *noku* の形をとり、語幹末が *o* の *ozo-*「怖い」は *oze* となる。

- (117) *k'owa nokuune:.*
kjo=wa noku-i=ne
 今日=TOP 暑い-NPST=SFP
 「今日は暑いね」

- (118) *orano ojaziwa oze.*
ora=no ojazi=wa ozo-i
 1SG=GEN おやじ=TOP 怖い-NPST
 「俺のおやじは怖い」

過去形は、語幹に動詞化接辞 *-kar-* を後接させて、過去接辞 *-ta* が後接した形をとる。*-kar-* は子音語幹を派生させる接辞だが、本方言においては、この過去形および条件形 *-tara* が接続する場合のみのため、促音便形をとって *-kaQ-* の形で現れる。

- (119) *orano ojaziwa maewa ozokatta.*
ora=no ojazi=wa mai=wa ozo-kaQ-ta
 1SG=GEN おやじ=TOP 前=TOP 怖い-VLZ-PST
 「俺のおやじは前は怖かった」

否定形は、語幹に *-ne* を後接させて作る。この *-ne* は形容詞 *na-*「無い」に由来すると考えられるため、*-na-i* と分析する。過去否定形の場合は *-na-kaQ-ta* となる。他にも、否定形は以下の (120) のように形式名詞 *koto* を用いて迂言的に表すこともある。

- (120) *kora mai koto neno:*
kore=wa ma-i koto na-i=no
 これ=TOP うまい-NPST こと NEG-NPST=SFP
 「これはうまくないな」

6.1.2 接続類

連用形は、主に副詞として機能する形であり、語幹そのままの形か、語幹に *-ni* (*-N* となる場合もある) を後接した形である。(121) が語幹そのままの形で、(122) が *-ni* を伴う形である。

- (121) *sinaguna eɛŋkonj haja nome.*
sinaguna se-Nkoni haja nom-e
 ぐずぐず する-NEG.SIM 早い-INF 飲む-IMP
 「ぐずぐずしないで早く飲め」

- (122) *mukaεa: hajani hasiraeta.*
mukasi=wa haja-ni hasir-ae-ta
 昔=TOP 早い-INF 走る-POT-PST
 「昔は早く走ることができた」

次の (123) (124) のように、変化を表す *nar-* と共起して、変化後の状態を表す場合にも、形容詞は連用形をとる。

(123) *k'owa noku nattano:.*
kjo=wa noku naQ-ta=no
 今日=TOP 暑い.INF なる-PST=SFP
 「今日は暑くなったな」

(124) *miĩ o:ci:ni o:kin nattano:.*
mi-N oci=ni oRki-N naQ-ta=no
 見る-NEG うち=LOC 大きい-INF なる-PST=SFP
 「見ないうちに大きくなったな」

中止形は、語幹に *-te* が後接した形である。(125) のように、続く節の理由を表すことが多い。

(125) *karadaga jowate ɛmpomadɛ ikaren.*
karada=ga jowa-te eNpo=made ik-are-N
 体=NOM 弱い-SEQ 遠方 LMT 行く-POT-NEG
 「体が弱くて遠くまで行けない」

条件節を作る形は、*-ker(j)a* と *-kaQ-tara* の 2 種類がある。*-kaQ-tara* は過去形と同様に、動詞化接辞 *-kar-* を介する形である。両形式の意味的な違いは現時点では明らかではない。

6.2 コピュラ

コピュラは、名詞および名詞的形容詞（形容動詞）に後接し、以下のように語形変化する。

表 17 コピュラの屈折形式

		形容動詞 <i>mame</i> 「元気」	名詞 <i>isja</i> 「医者」	
終 止 類	非過去	肯定	<i>mame=da</i> <i>mame=na</i>	<i>isja=da</i>
		否定	<i>mame=da na-i</i>	<i>isja=da na-i</i>
	過去	肯定	<i>mame=daQta</i>	<i>isja=daQta</i>
		否定	<i>mame=da na-kaQ-ta</i>	<i>isja=da na-kaQ-ta</i>
	推量		<i>mame=dara</i>	<i>isja=dara</i>
接 続 類	連体		<i>mame=na</i>	<i>isja=no</i>
	連用		<i>mame=ni</i>	<i>isja=ni</i>
	中止		<i>mame=de</i>	<i>isja=de</i>
	条件 1		<i>mame=daQtara</i>	<i>isja=daQtara</i>
	条件 2		<i>mame=nara</i>	<i>isja=nara</i>

コピュラが形容動詞につく場合と、名詞につく場合との違いは、非過去肯定形および連体形である。(126)のように、形容動詞の場合、非過去肯定形に=da と=na の両方があるのに対して、(127)のように名詞の場合は=da のみである。

- (126) *kono hanawa {kʰi:redano / kʰi:renano}.*
kono hana=wa {kire=da=no / kire=na=no}
 この 花=TOP きれい=COP.NPST=SFP
 「この花はきれいだな」

- (127) *orano ojaziwa icada.*
ora=no ojazi=wa isja=da
 1SG=GEN おやじ=TOP 医者=COP.NPST
 「俺のおやじは医者だ」

なお、(128)のような疑問文の場合、形容動詞につくコピュラは=da よりも=na が用いられる傾向にある。

- (128) *ojattsanwa mamɛnaka.*
ojazi-saN=wa mame=na=ka
 おやじ-TTL=TOP 元気=COP.NPST=Q
 「おやじさんは元気か」

連体形は、形容動詞に=na が、名詞に=no がつく。名詞につく=no は属格助詞 (4.4.2) であり、=da のパラダイムの中に補充されていると考えられる。

否定形は、=da の後に na-i が続く形をとる。=da より後の形は、形容詞の否定形と同じ形であり、過去否定形は=da na-kaQ-ta となる。

- (129) *koka: maewa hatakeda nakatta.*
koko=wa mai=wa hatake=da na-kaQ-ta
 ここ=TOP 前=TOP 畑=COP ない-VLZ-PST
 「ここは前は畑ではなかった」

推量形の=dara は、名詞・形容動詞以外にもつく。ただし、6.3 で記述する拡張コピュラ構文における=da とは異なり、もっぱら推量を表す形式である。

- (130) *ojaziwa sake nondarakana.*
ojazi=wa sake noN=dara=kana
 おやじ=TOP 酒 飲む.NPST=COP.INFR=Q
 「おやじは酒を飲むかな」

コンピュータの丁寧形は、=desu となる¹。名詞および形容動詞に後接して、過去の場合は=desita のように語形変化する。

- (131) *sora omaesanga kaeta d̄zi:desi.*
sore=wa omae-saN=ga kai-ta zi=desu
 それ=TOP 2SG-TTL=NOM 書く -PST 字=COP.POL.NPST
 「それはあなたが書いた字です」

6.3 拡張コンピュータ構文

本方言では、動詞や形容詞にも=da が直接つく。たとえば、次の (132) と (133) のように、動詞を述語とする疑問文に=da がつくものとつかないものの両方がある。両者の間にニュアンスの違いはあるようだが、詳細は解明されていない。(134) は、=desu が動詞に接続した例である。

- (132) *anta so:de itsyū ikykaja.*
aNta sorede icu ik-u=kaja
 2SG それで いつ 行く -NPST=Q
 「それであなたはいつ行くの？」

- (133) *ome itsyū ikudakaja.*
ome icu ik-u=da=kaja
 2SG いつ 行く -NPST=COP.NPST=Q
 「おまえはいつ行くの？」

- (134) *sono sigotowa omaesanga si:desika.*
sono sigoto=wa omai-saN=ga su-ru=desu=ka
 その 仕事=TOP 2SG-TTL=NOM する -NPST=COP.POL.NPST=Q
 「その仕事はあなたがするのですか」

平叙文では、動詞に=da がつくと、行為指示表現として機能することが多い。その際、終助詞=wa や=ga を伴うことが多い。次の (135) と (136) は、動詞に=da がついた例で、(137) は補助動詞 *gos-u* に=da がついて依頼を表す文である。

¹ =da と同様に=desu で1つの接語と考え、=des-u のように屈折接辞をとるとは考えない。

- (135) *ot̃ea iretaken nondawa.*
o-cja ire-ta=keN nom-u=da=wa
 POL-茶 入れる-PST=CSL 飲む-NPST=COP=SFP
 「お茶を入れたから飲んでね」
- (136) *hogami ɛɛŋkoni kott̃si mi:daga*
hogami se-Nkoni koQci mi-ru=da=ga
 よそ見 する-NEG.SIM こっち 見る-NPST=COP=SFP
 「よそ見しないでこっちを見ろ」
- (137) *koke namae kaite gosidawa*
koko=e namai kai-te gos-u=da=wa
 ここ=ALL 名前 書く-SEQ くれる-NPST=COP=SFP
 「ここに名前を書いてくれ」

そして、動詞かコピュラのどちらかを否定形にすると、禁止表現になる。(138) は動詞が否定形になったもので、(139) はコピュラが否定形になったものである。

- (138) *sogɛN hajagui si:da ne:ga*
sogɛN hajagui su-ru=da na-i=ga
 そんな 早食い する-NPST=COP ない-NPST=SFP
 「そんなに早食いするな」
- (139) *sogɛN hajagui ɛɛndaga.*
sogɛN hajagui se-N=da=ga
 そんな 早食い する-NEG=COP=SFP
 「そんなに早食いするな」

7. 連体詞, 副詞, 感動詞

網羅的な調査には至っていないが、指示詞以外の連体詞には、oRkjaN「大きな」が確認されている。

- (140) *o:kjan simo komɛ simo dott̃s̃imo daezida.*
oRkjaN si=mo koma-i si=mo doQci=mo daizi=da
 大きな 人=ADT 小さい-NPST 人=ADT どちら=ADT 大事=COP.NPST
 「大きな人も小さな人も、どちらも大事だ」

副詞には、俚言として知られているものが多い。以下では、ocirato と kaisiki の例を示す。ocirato は、「ゆっくり」や「のんびり」といった意味の様態の副詞である。(141) のように、動作がゆっくりしていることを表したり、(142) のように様子がのんびりしているさまを表したりする。

- (141) *otsirato* *ino.nahaejo.*
ocirato *inor-inahai=jo*
 ゆっくり 帰る-HON.IMP=SFP
 「ゆっくり帰りなさいよ」

- (142) *dogezo* *otsirato* *s̄ite* *itte* *gosinahae.*
doge=zo *ocirato* *si-te* *iQ-te* *gos-inahai*
 どう=FOC ゆっくり する-SEQ 行く-SEQ くれる-HON.IMP
 「どうぞゆっくりしてってください」

kaisiki は、次の (143) のように否定語と呼応して「まったく～ない」の意味を表す。

- (143) *sog'anj* *koto* *kais̄iki* *siradatta.*
sogjaN *koto* *kaisiki* *sir-adaQta*
 そんな こと まったく 知る-NEG.PST
 「そんなこと、まったく知らなかった」

感動詞には、間投助詞的に用いられる *ke* や、発話の冒頭で用いられる *naNto*、驚いたときの *adaN* などがある。これらの詳しい意味や用法は未解明である。他にもあいさつ表現として、*tadamono daNdaN* 「いつもありがとう」や、以下の (144) のような *beQtaR* などの決まり文句がある。

- (144) *betta:* *betta:* *gottsosanni* *na:mas̄ite.*
beQtaR *beQtaR* *goQco-san=ni* *nar-imas-ite*
 いつも いつも ごちそう-TTL=DAT なる-POL-SEQ
 「いつもいつも、ごちそうさんになりまして」 (お礼のことば)

8. 疑問詞

本方言における疑問詞には、以下のようなものがある。表 18 では、指示詞 (4.2.2) とそれ以外のものに分けて整理している。

表 18 疑問詞の一覧

	指示詞以外	指示詞
代名詞 (もの)	nani / naN	dore
代名詞 (人)	dare	doici
場所名詞		doko
方向名詞		doQci
副詞	icu (時間) naNbo (数量・値段) nasite / naNde (理由)	doge (方法・様態)
連体詞 1		dogena dogjaN
連体詞 2		dono

人を指す疑問代名詞 dare は、指示対象が複数の場合に複数接尾辞 -jaci/-raci が後接することがある。以下の (145) からわかるように、普通名詞と同様に、複数標示は義務的ではない。

- (145) *ano k^wasjwa {da:ga / da:jatsjga / da:ratsjga} kyttakae*
ano kwasi=wa {dare=ga / dare-jaci=ga / dare-raci=ga} kut-ta=kai
 あの 菓子=TOP {誰=NOM / 誰-PL=NOM / 誰-PL=NOM} 食う-PST=Q
 「あの菓子は誰が食ったんだ」

naNbo は値段と数量のどちらを表すときにも使える。(146) は値段, (147) は数量を尋ねる例である。

- (146) *sono ie nambohokane.*
sono ie naNbo=hodo=kane
 その 家 いくら=ほど=Q
 「その家はいくらぐらいなの？」
- (147) *sono ie hejawa nambohodo a:kane.*
sono ie heja=wa naNbo=hodo ar-u=kane
 その 家 部屋=TOP いくつ=ほど ある-NPST=Q
 「その家、部屋はいくつぐらいあるの？」

また、疑問詞に=ka や=dai をつけると不定表現になる。(148) と (149) は=ka の例, (150) と (151) は=dai の例である。

(148) *jamano sakiji najka a:kane.*
jama=no saki=ni naN=ka ar-u=kane
 山=GEN 先=LOC 何=Q ある-NPST=Q

「山の向こうに何かあるの？」

(149) *ḍzeji namboka motte kita.*
zeni naNbo=ka mot-te ki-ta
 銭 いくら=Q 持つ-SEQ 来る-PST

「お金をいくらか持ってきた」

(150) *da:daeni asi φumaeta.*
dare=dai=ni asi hum-ae-ta
 誰=Q=DAT 足 踏む-PASS-PST

「誰かに足を踏まれた」

(151) *ano siwa naeitedae sukanwa:.*
ano si=wa nasite=dai suk-aN=wa
 あの 人=TOP なぜ=Q 好く-NEG=SFP

「あの人はなぜか嫌いだ」

さらに、=ka や=dai は節末について間接疑問文を作ることができる。

(152) *ojazi nani nondε: siran.*
ojazi nani noN=dai sir-aN
 父 何 飲む.NPST=Q 知る-NEG

「おやじが何を飲むか知らない」

他にも、=dai は焦点助詞として機能し、否定語と呼応して用いられる。この点については次節で記述する。

9. 焦点助詞など

焦点助詞には、提題の=wa、累加の=mo、極限の=made、=sae など、様々な形式が確認されている。ここでは、前節でも取り上げた=dai と、限定の=hodo について記述する。

=dai は、以下の (153) (154) のように否定表現と呼応して用いられる。

(153) *gakkona mo darendae oran.*
gaQko=ni=wa mo dareN=dai or-aN
 学校=LOC=TOP もう 誰=FOC いる-NEG

「学校にはもう誰もいない」

- (154) *taro:wa gakko: itsintsidae jasumadatta*
taroR=wa gakkoR iciNci=dai jasum-adaQta
 太郎=TOP 学校 一日=FOC 休む-NEG.PST
 「太郎は学校を一日も休まなかった」

(153) では疑問詞 *dare*, (154) では最低基準を表す *iciNci* に=*dai* が後接し、「誰も～ない」「ひとつも～ない」といった否定と呼応した表現になっている。また、疑問詞や数詞でなくても、以下のように=*dai* が最低基準を表す語につくことがある。(155) では、目的語である *hoN* に=*dai* が後接しているが、(156) では *hoN hirak-i* に=*dai* が後接しており、「本」ではなく「本を開くこと」に焦点が当たっている。

- (155) *taro:wa beŋkjo:ga jade hondae φirakan.*
taroR=wa beNkjoR=ga ja=de hoN=dai hirak-aN
 太郎=TOP 勉強=NOM 嫌=COP.SEQ 本=FOC 開く-NEG
 「太郎は勉強が嫌で、本も開かない」
- (156) *hoN φirakidae eεN.*
hoN hirak-i=dai se-N
 本 開く-INF=FOC する-NEG
 「本を開きさえしない」

次に、=*hodo* について記述する。=*hodo* はおよその数量を表す「～ほど、～くらい」の意味の他に、「～だけ」のように「限定」も表す。(157) は目的語の名詞を取り立てた例、(158) は述語の名詞を取り立てた例で、(159) は動詞に=*hodo* がついた例である。

- (157) *gi:ni:hodo kate kite goεε.*
giRniR=hodo ka-te ki-te gos-e
 牛乳=FOC 買う-SEQ 来る-SEQ くれる-IMP
 「牛乳だけ買ってきてくれ」
- (158) *kiowa mo ne:hododa.*
kjo=wa mo ne-ru=hodo=da
 今日=TOP もう 寝る-NPST=FOC=COP.NPST
 「今日はもう寝るだけだ」
- (159) *φyukuuroni ha:hodo irete i:zi.*
hukuro=ni hair-u=hodo ire-te i-i=zi
 袋=LOC 入る-NPST=FOC 入れる-SEQ 良い-NPST=SFP
 「袋に入るだけ入れていいぞ」

10. 節末の助詞

10.1 接続助詞

原因・理由を表す接続助詞に=keN がある。コンピュータに後接したと思われる=dakeN という形式も用いられるが、=keN と=dakeN の文法的・意味的な違いは明らかになっていない。

- (160) *ot̃ca iretaken nomaceai.*
o-cja ire-ta=keN nom-aQsjai
POL-茶 入れる-PST=CSL 飲む-HON.IMP

「お茶を入れたから飲みなさい」

- (161) *oto:toga ikitetete i:dakeN ikaceta.*
otoRto=ga ik-ita-i=tete juw-u=dakeN ik-ase-ta
弟=NOM 行く-DES-NPST=QT 言う-PST=CSL 行く-CAUS-PST

「弟が行きたいと言うから行かせた」

(160) の=dakeN は、コンピュータの=da と接続助詞の=keN に分けられそうにも思われるが、(161) の=keN との違いが不明である（「のだから」とも意味的に合わない）。

=keN の他に原因・理由を表す接続助詞に、=de がある。

- (162) *amega φytt̃eo:de ikareN.*
ame=ga huQ-cjor-u=de ik-are-N
雨=NOM 降る-IPFV-NPST=CSL 行く-POT-NEG

「雨が降っているから行けない」

逆接の接続助詞には、=domo や=ga がある。=domo については、=dadomo という形式もあり、=keN / =dakeN と同様に、意味的な違いは不明である。(163) が=domo、(164) が=dadomo の例、(165) が=ga の例である。

- (163) *ima agen jasasĩkenadomo maiwa ozokattaka.*
ima ageN jasasi-ge=na=domo mai=wa ozo-kaQ-ta=ka
今 ああ 優しい-SEEM=COP.NPST=CNC 前=TOP 怖い-VLZ-PST=Q

「今はあんなに優しそうだけど、前は怖かったのか」

- (164) *ikjite kota ne:tete i:dadomo oto:to:*
ik-ita-i koto=wa na-i=tete juw-u=dadomo otoRto=o
 行く-DES-NPST こと=TOP ない-NPST=QT 言う-NPST=CNC 弟=ACC
mo:jari ikaæeta.
moRjari ik-ase-ta
 無理やり 行く-CAUS-PST

「行きたくないと言うけど、弟を無理やり行かせた」

- (165) *waæa eeneeda nakattaga gakkode hataraitotta.*
wasi=wa seNse=da na-kaQ-ta=ga gaQkoR=de hatarai-cjoQ-ta
 1SG=TOP 先生=COP NEG-VLZ-PST=CNC 学校=LOC 働く-IPFV-PST
 「私は先生ではなかったが、学校で働いていた」

他には、「のに」に当たると思われる=ni もある。

- (166) *sekkaku eeki totteottani siran øytojni suwaraeta.*
seQkaku seki toQ-cjoQ-ta=ni sir-aN hito=ni suwar-ae-ta
 せっかく 席 取る-IPFV-PST=CNC 知る-NEG 人=DAT 座る-PASS-PST
 「せっかく席を取っていたのに、知らない人に座られた」

引用節末に現れる接続助詞に=tete がある。

- (167) *ikjite kota ne:tete i:dadomo*
ik-ita-i koto=wa na-i=tete juw-u=dadomo
 行く-DES-NPST こと=TOP ない-NPST=QT 言う-NPST=CNC
 「行きたくないと言うけど」

10.2 終助詞

平叙文で用いられる終助詞には、=wa, =ga, =zi, =ne, =ja などがある。これらは、(170) の=wa=na, (171) の=wa=ja, (172) の=zi=ne のように、相互に承接することがある。

- (168) *akagoga arukato eijæo:wa.*
akago=ga aruk-a=to si-cjor-u=wa
 赤子=NOM 歩く-VOL=QT する-IPFV-NPST=SFP
 「赤子が泣こうとしているよ」

- (169) *mo mesi dekĩtazi.*
mo mesi deki-ta=zi
 もう 飯 できる-PST=SFP
 「もう飯ができたよ」
- (170) *ima sake nondzo:wana.*
ima sake noN-zjor-u=wa=na
 今 酒 飲む-IPFV-NPST=SFP=SFP
 「今、酒を飲んでいるよ」
- (171) *zettae amewa φuranwaja.*
zeQtai ame=wa hur-aN=wa=ja
 絶対 雨=TOP 降る-NEG=SFP=SFP
 「絶対雨は降らないよ」
- (172) *sora itsibaã oto:toga komezine.*
sore=wa icibaN otoRto=ga koma-i=zi=ne
 それ=TOP 一番 弟=NOM 小さい-NPST=SFP=SFP
 「(きょうだいのうち誰がいちばん小さいか) そりゃあ末弟が小さいよ」

他に平叙文につく終助詞には、引用や伝聞を表すものがある。(173) は=toja, (174) は=gena の例である。

- (173) *iejasuwa atamaga jokattatoja.*
iejasu=wa atama=ga jo-kaQ-ta=toja
 家康=TOP 頭=NOM 良い-VLZ-PST=QT
 「家康は頭がよかったらしい」
- (174) *iejasuwa atamaga jokattagenano:.*
iejasu=wa atama=ga jo-kaQ-ta=gena=no
 家康=TOP 頭=NOM 良い-VLZ-PST=HS=SFP
 「家康は頭がよかったらしい」

命令形に後接する終助詞には、=ja などがある。

- (175) *sono hon omae goejeja:.*
sono hoN omai gos-e=ja
 その 本 2SG くれる-IMP=SFP
 「その本をくれよ」

意志形には、=ja, =koi などが後接して、勧誘の意味を表す（5.1.3 も参照）。

- (176) *orajatsito akirade iεεoni ikaja.*
ora-jaci=to akira=de iQsjoni ik-a=ja
 1-PL=COM アキラ（人名）=INST 一緒に 行く-VOL=SFP
 「俺たちとアキラで一緒に行こうよ」

疑問文では、=kai, =kane, =kaja などの=ka を含むもののほかに、=tete が用いられる。=tete は引用節で用いられるものと同じと考えられるが、詳細は不明である。(178) のように、=ja が後接して=tete=ja となることも多い。

- (177) *nande sokoni tattεo:tete.*
naNde soko=ni taQ-cjor-u=tete
 なんで そこ=LOC 立つ-IPFV-NPST=QT
 「なんでそこに立っているの？」

- (178) *imango nani εjtεo:teteja.*
imaNgo nani si-cjor-u=tete=ja
 今 何 する-IPFV-NPST=QT=SFP
 「今何しているの？」

略号一覧

-	接辞境界		COM	comitative	共格
=	接語境界		COP	copula	コピュラ
#	語境界		CSL	causal	理由
1	1 人称		DAT	dative	与格
2	2 人称		DES	desirious	願望
ABL	ablative	奪格	DRG	derogative	軽卑
ACC	accusative	対格	GEN	genitive	属格
ADT	additional	累加	HON	honorific	尊敬
ALL	allative	方向格	HS	hearsay	伝聞
CAUS	causative	使役	IMP	imperative	命令
CL	classifier	類別詞	INF	infinitive	非定形
CMP	comparative	比格	INFR	inferential	推量
CNC	concessive	逆接	INST	instrumental	具格
CND	conditional	条件	IPFV	imperfective	非完成相
CNF	confirmative clitic	間投助詞	LMT	limitative	限界格

LOC	locative	所格	QT	quotative	引用
NEG	negation	否定	SEEM	seeming	様態
NOM	nominative	主格	SEQ	sequential	中止
NPST	non-past	非過去	SFP	sentence final particle	終助詞
PASS	passive	受身	SIM	simultaneous	付帯
PL	plural	複数	TOP	topic	提題
POL	polite	丁寧	TTL	title	敬称
POT	potential	可能	VLZ	verbalizer	動詞化
PST	past	過去	VOL	volitional	意志
Q	question	疑問			

参照文献

- 荻野千砂子 (2016) 「出雲方言の指示詞カ, サに関する報告」『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』79-85. 立川：国立国語研究所.
- 木部暢子編 (2016) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』立川：国立国語研究所.
- 友定賢治編 (2004) 『出雲方言資料』湖西振興機構受託研究報告書.
- 平子達也 (2016) 「出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』69-77. 立川：国立国語研究所.
- 平子達也・友定賢治 (2018) 「要地方言の活用体系記述 島根県出雲市平田方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (4) 活用体系 (3)』77-86, 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 広戸惇 (1949) 『山陰方言の語法』松江：島根新聞社.
- 広戸惇 (1950) 『山陰方言の研究』松江：島根県立教育研修所.
- 室山敏昭 (1964) 「鳥取県伯耆西部方言におけるラ行音節の隠在現象」『国文学攷』33: 24-34, 広島大学国語国文学会.